Asian Party

アジアンパーティは、「アジアと創る」をコンセプトに、
アジアのヒト、モノ、情報が集う社交場をイメージし、今年で10回目を迎えました。
令和4年度は、「The Creators」や「福岡アジア文化賞」のほか、
アートフェアアジア福岡や民間映画祭など、
民間企業・団体等と連携した様々なイベントを
全30事業実施しました。

The Creators

アートフェアアジア福岡2022

福岡ミュージックマンス

発行
福岡アジア文化賞委員会事務局

〒810-8620　福岡市中央区天神1-8-1　福岡市総務企画局国際部内
TEL 092-711-4930 FAX 092-735-4130
E-mail　f.prize@io.ocn.ne.jp　https://fukuoka-prize.org/

第32回

福岡アジア文化賞

FUKUOKA PRIZE 2022

学術研究賞
タイモン・スクリーチ
Timon SCREECH
（英国／美術史家）

大賞
林 英哲
HAYASHI Eitetsu
（日本／太鼓奏者）

芸術・文化賞
シャジア・シカンダー
Shahzia SIKANDER
（米国／アーティスト）

報告書

主催　福岡市、公益財団法人福岡よかトピア国際交流財団
後援　外務省、文化庁

福岡アジア文化賞の受賞者

= 創設特別賞　= 大賞　= 学術研究賞　= 芸術・文化賞

パキスタン
- 第7回 ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン（カッワーリー歌手）
- 第17回 アクシ・ムフティ（民俗文化保存専門家）
- 第27回 ヤスミーン・ラリ（建築家・建築史家・人道支援活動家）

ネパール
- 第15回 ラーム・ダヤル・ラケーシュ（民俗文化研究者）

インド
- 第2回 ラヴィ・シャンカール（音楽家・シタール奏者）
- 第5回 パドマー・スブラマニヤム（舞踊家）
- 第8回 ロミラ・ターパル（歴史学者）
- 第15回 アムジャッド・アリ・カーン（サロード奏者）
- 第18回 アシシュ・ナンディ（社会・文明評論家）
- 第20回 パルタ・チャタジー（政治学・歴史学者）
- 第23回 ヴァンダナ・シヴァ（環境哲学者）
- 第24回 ナリニ・マラニ（アーティスト）
- 第26回 ラーマチャンドラ・グハ（歴史学者・社会学者）
- 第27回 A.R.ラフマーン（作曲家・作詞家・歌手）
- 第29回 ティージャン・バーイー（パンダワーニー奏者）
- 第31回 パラグミ・サイナート（ジャーナリスト）

アジア以外の国・地域

英国
- 第1回 ジョゼフ・ニーダム（中国科学史研究者）
- 第28回 クリス・ベーカー（歴史学者）
- 第32回 タイモン・スクリーチ（美術史家）

第 32 回学術研究賞受賞者
タイモン・スクリーチ

アイルランド
- 第11回 ベネディクト・アンダーソン（政治学者）

オーストラリア
- 第5回 王 賡 武（歴史学者）
- 第13回 アンソニー・リード（歴史学者）
- 第24回 テッサ・モーリス＝スズキ（アジア地域研究者）

フランス
- 第20回 オギュスタン・ベルク（文化地理学者）

ドイツ
- 第22回 ニールズ・グッチョウ（建築史家・修復建築家）

オランダ
- 第30回 レオナルド・ブリュッセイ（歴史学者[東南アジア史専門家]）

米国
- 第2回 ドナルド・キーン（日本文学・文化研究者）
- 第3回 クリフォード・ギアツ（文化人類学者）
- 第6回 ナム・ジュン・パイク（ビデオ・アーティスト）
- 第9回 スタンレー・J・タンバイア（人類学者）
- 第21回 ジェームズ・C・スコット（政治学者・人類学者）
- 第25回 エズラ・F・ヴォーゲル（社会学者）
- 第32回 シャジア・シカンダー（アーティスト）

第 32 回芸術・文化賞受賞者
シャジア・シカンダー

中国
- 第1回 巴 金（作家）
- 第4回 費 孝 通（社会学・人類学者）
- 第7回 王 仲 殊（考古学者）
- 第13回 張 芸 謀（映画監督）
- 第14回 徐 冰（アーティスト）
- 第15回 厲 以 寧（経済学者）
- 第17回 莫 言（作家）
- 第20回 蔡 國 強（現代美術家）
- 第28回 王 名（行政学者、NGO・市民社会研究者）
- 第29回 賈 樟 柯（映画監督）

モンゴル
- 第4回 ナムジリン・ノロゥバンザト（声楽家）
- 第17回 シャグダリン・ビラ（歴史学者）

ブータン
- 第16回 タシ・ノルブ（伝統音楽家）

香港
- 第19回 アン・ホイ（映画監督）
- 第25回 ダニー・ユン（文化クリエイター）

台湾
- 第10回 侯 孝 賢（映画監督）
- 第18回 朱 銘（彫刻家）

ラオス
- 第16回 ドアンドゥアン・ブンニャウォン（織物研究家）

ベトナム
- 第7回 ファン・フイ・レ（歴史学者）
- 第26回 ミン・ハン（ファッションデザイナー）

カンボジア
- 第8回 チェン・ポン（劇作家・芸術家）
- 第22回 アン・チュリアン（民族学者・クメール研究者）
- 第28回 コン・ナイ（吟遊詩人、チャパイ・マスター）

フィリピン
- 第3回 レアンドロ・V・ロクシン（建築家）
- 第12回 マリルー・ディアス=アバヤ（映画監督）
- 第14回 レイナルド・C・イレート（歴史学者）
- 第23回 キドラット・タヒミック（映画作家等）
- 第27回 アンベス・R・オカンポ（歴史学者）
- 第30回 ランドルフ・ダビッド（社会学者）

マレーシア
- 第4回 ウンク・A・アジズ（経済学者）
- 第11回 ハムザ・アワン・アマット（影絵人形遣い）
- 第13回 ラット（マンガ家）
- 第19回 シャムスル・アムリ・バハルディーン（社会人類学者）

シンガポール
- 第10回 タン・ダウ（ヴィジュアルアーティスト）
- 第14回 ディック・リー（シンガーソングライター）
- 第21回 オン・ケンセン（舞台芸術家）

ミャンマー
- 第11回 タン・トゥン（歴史学者）
- 第16回 トー・カウン（図書館学者）
- 第26回 タン・ミン・ウー（歴史学者）

スリランカ
- 第13回 キングスレー・M・デ・シルワ（歴史学者）
- 第15回 ローランド・シルワ（文化遺産保存建築家）
- 第19回 サヴィトリ・グナセーカラ（法学者）

バングラデシュ
- 第12回 ムハマド・ユヌス（経済学者）
- 第19回 フォリダ・パルビーン（音楽家）

タイ
- 第1回 ククリット・プラモート（作家・政治家）
- 第5回 スパトラディット・ディッサクン（考古学・美術史学者）
- 第10回 ニティ・イヨウシーウォン（歴史学者）
- 第12回 タワン・ダッチャニー（画家）
- 第18回 シーサック・ワンリポードム（人類学・考古学者）
- 第23回 チャーンウィット・カセートシリ（歴史学者）
- 第24回 アピチャッポン・ウィーラセタクン（映画作家・アーティスト）
- 第28回 パースック・ポンパイチット（経済学者）
- 第31回 プラープダー・ユン（作家、映画作家、アーティスト）

インドネシア
- 第2回 タウフィック・アブドゥラ（歴史学者・社会科学者）
- 第6回 クンチャラニングラット（文化人類学者）
- 第9回 R. M. スダルソノ（舞踊家・舞踊研究者）
- 第11回 プラムディヤ・アナンタ・トゥール（作家）
- 第23回 クス・ムルティア・パク・ブウォノ（宮廷舞踊家）
- 第25回 アジュマルディ・アズラ（歴史学者）

★福岡

日本
- 第1回 黒澤 明（映画監督）
- 第1回 矢野 暢（社会科学者）
- 第2回 中根 千枝（社会人類学者）
- 第3回 竹内 實（中国研究者）
- 第4回 川喜田 二郎（民族地理学者）
- 第5回 石井 米雄（東南アジア研究者）
- 第6回 辛島 昇（歴史学者）
- 第7回 衞藤 瀋吉（国際関係研究者）
- 第8回 樋口 隆康（考古学者）
- 第9回 上田 正昭（歴史学者）
- 第10回 大林 太良（民族学者）
- 第12回 速水 佑次郎（経済学者）
- 第14回 外間 守善（沖縄学者）
- 第17回 濱下 武志（歴史学者）
- 第20回 三木 稔（作曲家）
- 第21回 毛里 和子（現代中国研究者）
- 第24回 中村 哲（医師）
- 第29回 末廣 昭（経済学者、地域研究者[タイ]）
- 第30回 佐藤 信（劇作家、演出家）
- 第31回 岸本 美緒（歴史学者）
- 第32回 林 英哲（太鼓奏者）

韓国
- 第3回 金 元 龍（考古学者）
- 第6回 韓 基 彦（教育学者）
- 第8回 林 権 澤（映画監督）
- 第9回 李 基 文（言語学者）
- 第16回 任 東 権（民俗学者）
- 第18回 金 徳 洙（伝統芸能家）
- 第21回 黄 秉 冀（音楽家）
- 第22回 趙 東 一（文学者）

第 32 回大賞受賞者
林 英哲

CONTENTS

福岡アジア文化賞の受賞者 …… 1・2
福岡アジア文化賞とは …… 3・4
第32回受賞者
- 大　賞　林 英哲 …… 5
- 学術研究賞　タイモン・スクリーチ …… 6
- 芸術・文化賞　シャジア・シカンダー …… 7

授賞式 …… 8～12
市民フォーラム
- 林 英哲 …… 13
- タイモン・スクリーチ …… 14
- シャジア・シカンダー …… 15

第32回 芸術・文化賞受賞記念展示 …… 16
受賞者による学校訪問 …… 17～18
歴代受賞者招聘イベント …… 19
歴代受賞者名鑑 …… 20～26

福岡アジア文化賞の趣旨

アジアは、多様な民族、言語、文化が共に生き、交流する世界です。その多様な文化は、長い歴史と伝統を守り抜くだけでなく、新しいものをも生み出してきました。

今、グローバリゼーション時代の到来により、文化面にも画一化の波が押し寄せ、アジア固有の文化が失われていく恐れがあります。このような時代にこそ、独自の文化を守り、育て、共生を進める必要があります。

福岡は、古くから日本の窓口として、アジア諸地域との交流において重要な役割を担ってきました。このような福岡の特性を踏まえて、アジア地域の優れた文化の振興と相互理解および平和に貢献するため、1990年に市、学界、民間が一体となって福岡アジア文化賞を創設しました。以来、アジアのほぼ全域にわたり、多くの素晴らしい受賞者の功績を顕彰しています。

未来へつながる文化交流とは、長い歴史と伝統をもつ固有の文化を保存、継承するのみならず、変化の中から生まれようとする新しいものにも目を向け、尊重し、そこから学びながら新たに創造していくことであり、福岡市は、市民と共にアジアの文化交流都市を目指しています。

この賞を通じて、私たちは市民と共に、アジアの学術・芸術・文化に貢献した人々に敬意を表し、アジアの固有で多様な文化の価値を、これからも都市の視点で広く世界に伝えていきたいと考えています。

1.目的

アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に顕著な業績を挙げた個人又は団体を顕彰することにより、アジアの文化の価値を認識し、その文化を守り育てるとともに、アジアの人々が相互に学び合いながら、幅広く交流する基盤をつくることに貢献することを目的とします。

2.賞の内容

大　賞

賞金　¥5,000,000

アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に貢献し、その国際性、普遍性、大衆性、独創性などにより、世界に対してアジアの文化の意義を示した個人又は団体を対象としています。

学術研究賞

賞金　¥3,000,000

人文科学・社会科学などの、アジアを対象とした学術研究における優れた成果により、アジアの理解に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体を対象としています。

芸術・文化賞

賞金　¥3,000,000

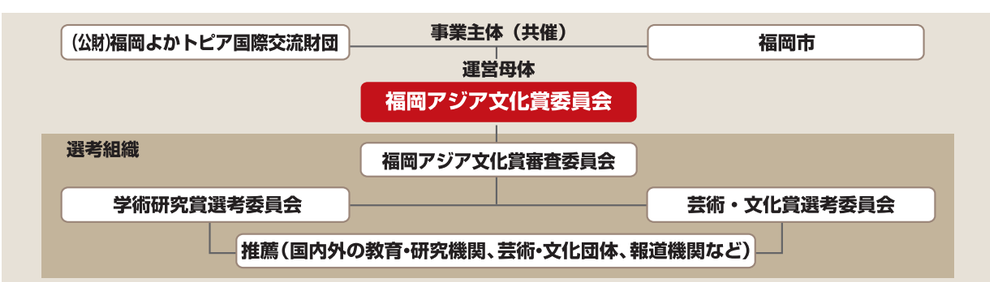
アジアの固有かつ多様な芸術・文化の育成又は発展に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体を対象としています。

3.対象圏域

東アジア、東南アジアおよび南アジア地域

4.主催

福岡市、公益財団法人福岡よかトピア国際交流財団※



※福岡よかトピア国際交流財団：アジア太平洋博覧会–福岡’89の成功を記念するとともに、アジアに開かれた福岡の歴史、文化、その他の特性を生かした国際交流を促進する活動を行うことにより、市民一人ひとりが多様性を認め合いながら国際的な相互理解を深める多文化共生社会の実現に寄与し、地域の発展と国際平和に貢献することを目的としています。

福岡アジア文化賞委員会委員

2022年10月1日現在　委員は五十音順、敬称略

特別顧問	金井　正彰	外務省国際文化交流審議官
〃	都倉　俊一	文化庁長官
〃	服部　誠太郎	福岡県知事
名誉会長	髙島　宗一郎	福岡市長
会　長	谷川　浩道	（公財）福岡よかトピア国際交流財団理事長
副会長	石橋　達朗	九州大学総長
〃	伊藤　嘉人	福岡市議会議長
〃	中村　英一	福岡市副市長
監　事	小川　明子	福岡市会計管理者
〃	満生　美保	福岡市社会福祉協議会常務理事
委　員	浅見　昭彦	日本経済新聞社常務執行役員西部支社代表
〃	石橋　正信	福岡市教育委員会教育長
〃	江口　勝	福岡県副知事
〃	唐池　恒二	九州旅客鉄道株式会社取締役相談役
〃	北島　己佐吉	九州産業大学学長
〃	国松　徹	読売新聞西部本社代表取締役社長
〃	久保田　勇夫	株式会社西日本フィナンシャルホールディングス代表取締役会長
〃	倉富　純男	西日本鉄道株式会社代表取締役会長
〃	小松　浩子	日本赤十字九州国際看護大学学長
〃	朔　啓二郎	福岡大学学長
〃	酒見　俊夫	西部ガスホールディングス株式会社代表取締役会長
〃	佐藤　靖典	特定非営利活動法人福岡市レクリエーション協会副会長
〃	柴田　建哉	株式会社西日本新聞社代表取締役社長
〃	柴戸　隆成	株式会社福岡銀行取締役会長
〃	鈴木　史朗	九州運輸局長
〃	竹添　賢一	日本放送協会福岡放送局長
〃	豊馬　誠	九州電力株式会社代表取締役副社長執行役員
〃	苗村　公嗣	九州経済産業局長
〃	西村　松次	株式会社九電工取締役会長
〃	古川　清文	福岡市議会総務財政委員会委員長
〃	丸石　伸一	朝日新聞社西部本社代表
〃	安永　幸一	福岡文化連盟副理事長
〃	山口　剛司	福岡市議会副議長
〃	山本　修司	毎日新聞社執行役員西部本社代表
〃	G.W.バークレー	西南学院大学学長

第32回福岡アジア文化賞 審査・選考委員

福岡アジア文化賞審査委員会

委 員 長 ／石橋 達朗
九州大学総長
福岡アジア文化賞委員会副会長

副委員長／中村 英一
福岡市副市長
福岡アジア文化賞委員会副会長

委　　員／石坂 健治
日本映画大学教授
東京国際映画祭シニア・プログラマー
芸術・文化賞選考委員会委員長

委　　員／後小路 雅弘
北九州市立美術館館長
九州大学名誉教授
芸術・文化賞選考委員会副委員長

委　　員／清水 展
京都大学名誉教授
関西大学客員教授
学術研究賞選考委員会委員長

委　　員／竹中 千春
立教大学法学部元教授
学術研究賞選考委員会副委員長

委　　員／柄 博子
国際交流基金理事

委　　員／土屋 直知
株式会社正興電機製作所代表取締役会長

福岡アジア文化賞選考委員会 学術研究賞

委 員 長 ／清水 展
京都大学名誉教授
関西大学客員教授

副委員長／竹中 千春
立教大学法学部元教授

委　　員／木宮 正史
東京大学大学院総合文化研究科教授

委　　員／河野 俊行
九州大学主幹教授

委　　員／清水 一史
九州大学大学院経済学研究院教授

委　　員／高原 明生
東京大学大学院法学政治学研究科教授

委　　員／新田 栄治
鹿児島大学名誉教授

委　　員／脇村 孝平
大阪経済法科大学経済学部教授

福岡アジア文化賞選考委員会 芸術・文化賞

委 員 長 ／石坂 健治
日本映画大学教授
東京国際映画祭シニア・プログラマー

副委員長／後小路 雅弘
北九州市立美術館館長
九州大学名誉教授

委　　員／内野 儀
学習院女子大学日本文化学科教授
東京大学名誉教授

委　　員／宇戸 清治
東京外国語大学名誉教授

委　　員／小川 忠
跡見学園女子大学文学部教授

委　　員／寺内 直子
神戸大学大学院国際文化学研究科教授

委　　員／西村 幸夫
國學院大學観光まちづくり学部学部長

委　　員／松隈 浩之
九州大学大学院芸術工学研究院准教授

2022年10月1日現在　委員は五十音順、敬称略

第32回大賞受賞者

林　英哲

日本／太鼓奏者（太鼓独奏者、作曲・演出家、英哲風雲の会主宰・芸術監督）

主な経歴

1952	広島県生まれ
1970	広島県立東城高等学校　卒業
1971-81	「佐渡・鬼太鼓座」創設参加・所属　太鼓演目の創作・再構成を担う同座の中心プレイヤー
1981-82	「鼓童」創設メンバー・所属　自ら「鼓童」と命名、創成期の演出も担当
1981	日本舞踊花柳流名取（花柳奈日人）
1982	プロフェッショナル太鼓独奏者として独立
1984	太鼓独奏者として米国カーネギー・ホールでデビュー
1985	初のソロコンサート「千年の寡黙」開催　1時間以上にわたり一人で太鼓を打ち続ける
2000	ベルリンフィル主催「ヴァルトビューネ・サマーコンサート」に「飛天遊」のソリストとして参加
2012-	小田原ふるさと大使（神奈川県小田原市）
2014	文化庁「2014年度文化交流使」任命
2015-19	東京藝術大学演奏芸術センター 客員教授
2019-	益子大使（栃木県益子町）
2020-	東京藝術大学演奏芸術センター「劇場技術論」「舞台芸術実践論」特別講師

主な受賞歴

1997	芸術選奨文部大臣賞（平成8年度第47回大衆芸能部門大賞／文化庁）
2001	日本伝統文化振興賞（2000年度第8回／日本文化藝術財団）
2017	松尾芸能賞大賞（第38回／松尾芸能振興財団）
2021	第5回JTS山本邦山記念賞（（公財）Japan Treasure Summit）

主な公演

〈国内〉・「レオナールわれに羽賜べ」2004-06, 2018.
・「千響シリーズ三部作」（国立劇場「日本の太鼓」企画プロデュース）東京, 2006-08.
・演奏活動50周年記念「独奏の宴―絶世の未来へ」東京, 2021.
・ソロ活動40周年記念「祝歳の響宴―絶世の未来へ」東京, 2022.

〈海外〉・「千年の寡黙2000」ドイツ, 2000.
・「北米ツアー/Jakuchu 2002」米国,2002
・「林 英哲Taiko／アーティスト・イン・レジデンス・プロジェクト」米国, 2004-06.
・「豪州ツアー」オーストラリア, 2006.
・「中東4カ国ツアー」バーレーン, オマーン, ドバイ, UAE, 2012.
・「カリブ海・北米ツアー」米国, トリニダード・トバゴ共和国, キューバ, 2014.
・「早稲田大学交響楽団欧州ツアー2015」ドイツ, オーストリア, フランス, 2015.
・「ラ・フォル・ジュルネ」フランス, 2016-19.

主な著作

・『あしたの太鼓打ちへ』晶文社, 1992.／羽鳥書店（増補新装版）, 2017.
・『太鼓日月－独走の軌跡』講談社, 2012.

贈賞理由

日本の太鼓音楽はwadaikoあるいはtaikoとして、今や世界どこでも通用する単語となった。林英哲氏は、その新しい創作太鼓音楽の最先端をつねに走り続けてきた音楽家である。日本には伝統的に、佐渡、秩父、八丈島、その他各地に、地域の祭礼・行事と結びついた民俗芸能の太鼓文化がある。氏の功績はそうした伝統的な太鼓を基盤としつつ、身体所作の力強さと美しさを伴う全く新しい舞台芸術として太鼓の表現を飛躍的に発展させたことにある。

「誰が打っても同じ」あるいは「とかく単調」と思われがちな太鼓の音は、実は、バチの種類、打つ箇所、力加減によって極めて多彩な音が出ること、種類の異なる多数の太鼓や鉦、笛を組み合わせれば、さらに表現が広がることを林氏は見事に実証した。また、世界各地のオーケストラ、ジャズの山下洋輔、ギニアのママディ・ケイタ、韓国のサムルノリの金徳洙（福岡アジア文化賞受賞者）など異なるジャンルの音楽家たちとのコラボレーションでも新たな表現を通して日本文化の国際発信に挑んでいる。氏は、それまでなかった独創的な太鼓音楽の様式を築き上げ、さらに現在なお進化し続ける孤高のランナーのような表現者である。

林氏は1970年代初頭からの11年間のグループ活動の後、太鼓ソリストとして本格的に活動を始めた。国内各地で精力的にコンサートに出演し、啓蒙的、慈善的な催しへも積極的に協力してきた。活動50周年を迎えた2021年3月には、サントリーホールで全曲ソロの50周年記念公演第一弾を行い、翌2022年2月には舞踏家の麿赤兒はじめ個性的な共演者を迎えた公演第二弾を開催して大きな話題となった。

一方、海外での活躍も目覚ましい。1984年には水野修孝作曲「交響的変容第3部」の太鼓ソリストとしてニューヨークのカーネギー・ホールでデビューを飾り、以後、北米、南米、ヨーロッパ、中東、アフリカ、アジア各地で演奏活動を繰り広げている。松下功作曲「飛天遊」は、海外のオーケストラとすでに100回以上演奏しているといい、林氏は今や海外で最もよく知られた日本人音楽家の一人となっている。これらの活動が評価されて、1997年に芸術選奨文部大臣賞、2001年に日本伝統文化振興賞、2017年に松尾芸能賞大賞、2021年にはJTS山本邦山記念賞を受賞した。

林氏を単に太鼓奏者と呼ぶことは適切ではない。なぜなら、演奏だけでなく、作曲、舞台の演出にも卓越した手腕を発揮しているからだ。氏は若い頃から美術に造詣が深く、太鼓の打ち手の身体の見せ方、舞台の視覚的デザインや装束には独特のセンスがある。また、2004年に氏自身が創作した「レオナール　われに羽賜べ」などは、音楽の枠を超えてドラマ性も併せ持つ、斬新な「音楽劇」の様相を呈している。こうした諸要素を統合した太鼓芸術が、林英哲という表現者が創り出してきた世界なのである。1995年からは「英哲風雲の会」を率い、後進の指導にも力を注いでいる。

このように、林氏は、日本の太鼓音楽の第一人者として、その独創的な表現の追求と完璧なパフォーマンスの実現にたゆまぬ努力と情熱を注いできた。その活動は世界規模である。林英哲氏の貢献はまさに「福岡アジア文化賞　大賞」にふさわしい。

第32回学術研究賞受賞者

タイモン・スクリーチ

英国／美術史家　国際日本文化研究センター教授

主な経歴

1961	英国、バーミンガム生まれ
1985	オックスフォード大学修士号（東洋・日本学）
1986	ハーバード大学修士号（美術史）
1991	ハーバード大学博士号（美術史）
1991-08	ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院（SOAS）准教授
2008-21	ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院（SOAS）教授
2014-	欧州学士院フェロー
2015	日本国際交流基金研究フェロー
2016	カルフォルニア大学バークレー校客員研究員
2017	東京外国語大学アジア・アフリカ研究教育コンソーシアム（CAAS）客員研究教授 東京大学客員教授
2018-	イギリス学士院フェロー
2019	カルフォルニア大学ロサンゼルス校客員研究員
2020-21	東京外国語大学特別招へい教授
2021-	国際日本文化研究センター教授

その他、シカゴ大学客員教授、明治大学特別招へい教授、多摩美術大学客員教授等を歴任

主な受賞歴

2014	日本大使より特別表彰（日英の交流400周年を記念して発足した団体「ジャパン400」開催における共同議長の功績を表して）
2014	Freeman of the City of London（ロンドン名誉市民賞）

主な著作

・『大江戸視覚革命:十八世紀日本の西洋科学と民衆文化』作品社, 1998. (英語版あり)
・『江戸の身体を開く』作品社, 1997. (韓国語版あり)
・『春画: 片手で読む江戸の絵』講談社, 1998. (講談社学術文庫版, 2010.) (英語、ポーランド語、台湾語版あり)
・『定信お見通し 寛政視覚改革の治世学』青土社, 2003. (英語版あり)
・『江戸の大普請: 徳川都市計画の詩学』講談社, 2007. (講談社学術文庫版,2017.)
・『阿蘭陀が通る: 人間交流の江戸美術史』東京大学出版, 2011.
・*Obtaining Images: Art, Production and Display in Edo Japan,* London: Reaktion Books/ Honolulu: University of Hawaii Press, 2012. (ペーパーバック第二版, 2017.)
・*Tokyo Before Tokyo: Power and Magic in the Shogun's City of Edo,* 1590-1868 , London: Reaktion Books/ Chicago: Chicago University Press, 2020.
・*The Shogun's Silver Telescope: God, Art, and Money in the English Quest for Japan,* 1600-1625, Oxford: Oxford UniversityPress, 2020.

贈賞理由

タイモン・スクリーチ氏は、江戸を主たるフィールドとする美術史家であり、広くビジュアル情報（視覚史資料）として残された歴史を解明し続ける博覧強記の日本研究者である。美術「を」研究するのみならず、美術「で」研究する学者ともいえる。

スクリーチ氏は、1961年に英国バーミンガムに生まれた。1985年にオックスフォード大学（東洋学）卒業後、ハーバード大学で修士号及び博士号（いずれも美術史）を取得、1991年から2021年までロンドン大学アジア・アフリカ研究学院（SOAS）において、さらに2021年からは国際日本文化研究センター教授として研究活動を展開している。また2018年にはthe British Academy のフェローに迎えられている。

スクリーチ氏は、研究の初期段階において、戯作文学、浮世絵など大衆的なビジュアル・カルチャー（視覚文化）、蘭学の相互の影響関係を明らかにするという問題意識を獲得し、多くのビジュアル資料から得られる証拠を支えとしながら意識の歴史を追ってきた。その成果は、大著の博士論文The Western Scientific Gaze and Popular Imagery in Later Edo Japan (1996) （邦訳『大江戸視覚革命』（1998年））として結実するが、その後も、人体解剖に焦点を当て、オランダでは切開が真理に至る唯一の方法であったのに対し、日本では多々ある真理へのアクセス手段の一に過ぎなかったと論じる『江戸の身体を開く』（1997年）、春画を芸術として美化するのではなく、春画は江戸のポルノグラフィーであると喝破する『春画―片手で読む江戸の絵』（1998年）といった話題作を立て続けに出版し、内外の学界に大きな衝撃を与えてきた。

美術は、それを生み出すメカニズムやそれを取り巻く文化的、社会的、経済的状況との相互作用と切り離しては論じ得ない。美術のこの側面に対するスクリーチ氏の意識は一貫して明確であるが、『定信お見通し―寛政視覚改革の治世学』（2003年）ではさらに一歩を進め、松平定信、狩野派、円山応挙、司馬江漢、谷文晁等を通して、政治と美術を扱い、視覚政治学ともいうべきジャンルを切り開いている。また氏の作品では、江戸時代における欧州との交流という視座が重要な位置を占めており（たとえば『阿蘭陀が通る―人間交流の江戸美術史』（2011年））、自ずと世界史の文脈における日本史（グローバル・ヒストリー）としての性格を帯びるスケールの大きさを併せ持つ。他方で『江戸の大普請―徳川都市計画の詩学』（2007年）ではかかる視座は敢えて脇におき、京都に対抗した新たな都市空間づくりという観点から江戸を分析する斬新な江戸研究を提示し、学界を刺激している。氏の作品は英語圏にとどまらず韓国語および中国語にも翻訳されて一層評価を高めている。

膨大なビジュアル及び文献情報を、多元的かつグローバルな視点から、斬新な方法論によって分析することで江戸研究の新たな地平を切り開いてきたタイモン・スクリーチ氏は、まさに「福岡アジア文化賞　学術研究賞」にふさわしい。

第32回芸術・文化賞受賞者

シャジア・シカンダー

米国／アーティスト

主な経歴

1969	パキスタン、ラホール生まれ
1991	ラホール国立芸術大学学士号（美術）
1992-93	ラホール国立芸術大学初の細密画の女性講師として教鞭をとる
1995	米国、ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン修士号（美術）
1995-97	ヒューストン美術館グラッセル美術学部コアフェローシップ
2004	NPO団体Art21役員
2005	ロサンゼルス、オーティス・カレッジ アート＆デザインにてジェニファー・ハワード・コールマン特任教授講義とレジデンシー
2007-08	ドイツ学術交流会レジデンシープログラムへ参加
2009	ロックフェラー財団ベラジオセンター　初回クリエイティブアートフェローシップ ホノルル、創設年度アーティスト・レジデンシー
2010	ニューヨーク、ナショナル・アカデミー・ミュージアムの学士院会員に選出
2016	ロードアイランド・スクール・オブ・デザインにてVikram and Geetanjali Kirloskar絵画客員研究員
2019	ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン理事

現在、米国で活動中。ニューヨーク市に在住。

主な受賞歴

1992	パキスタン・ラホール国立芸術大学よりシャリーフ・アリ賞／キプリング賞（最優秀特待生賞） シャリーフ賞（細密画部門優秀賞）
1993-95	ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン博士課程奨学フェローシップ賞
2003	ニューヨーク市長表彰
2005	パキスタン政府栄誉賞
2012	米国国務省より創立年国民芸術勲章

主な展覧会

- 「ホイットニー・ビエンナーレ」ホイットニー美術館, ニューヨーク, 1997.
- *Directions: Shahzia Sikander,* ハーシュホーン博物館と彫刻庭園, ワシントンD.C., 1999.
- 第51回、第54回、第56回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展, ヴェネツィア, 2005, 2011, 2015.
- 「シャジア・シカンダー」シドニー現代美術館, アイルランド現代美術館, ダブリン, 2007.
- 第4回福岡アジア美術トリエンナーレ, 福岡アジア美術館, 2009.
- 「トランスフォーメーション」東京都現代美術館, 2010.
- 「第13回イスタンブール・ビエンナーレ」イスタンブール, 2013.
- *PARALLAX,* ビルバオ・グッゲンハイム美術館ほか, 2014-17.
- 「シャジア・シカンダー: Extraordinary Realities」ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン美術館ほか, 2021-22.

主な著作

- *Extraordinary Realities*（共著）シカゴ大学出版, 2021.
- *Roots and Wings: How Shahzia Sikander Became an Artist*（共著）ニューヨーク現代美術館, 2021.

贈賞理由

シャジア・シカンダー氏は、国際的に活躍し高い評価を得ている南アジアを代表する、パキスタン出身の美術家である。ムガル朝の伝統に連なる細密画の世界に、最新のデジタル技術を駆使して、伝統絵画を今を生きる魅力的な造形として蘇らせ、新たな芸術表現を切り開いてきた姿は南アジアの女性アーティストのロールモデルとなり、後に続く世代に道を開き続けている。

シカンダー氏は、1969年、ムガル朝の古都ラホールに生まれた。同地の国立芸術大学で宮廷の伝統を受け継ぐミニアチュール（細密画）を学んだ後、米国に留学、ロードアイランド・スクール・オブ・デザインの修士課程に学び、より現代的な表現法を身につけ、今日的な主題に関心を向けていく。以後、パキスタンやベルリン、ラオスなど世界各地に住みながらその土地の問題に目を向け、近年はニューヨークを拠点に活発な制作活動を続けている。

1997年のホイットニー・ビエンナーレに招待されるなど、90年代にニューヨークの主要な美術館で展示の機会を得て、さらにハーシュホーン美術館（1999年）をはじめ全米各地で個展を開催し、細密画の形式や技法を基盤にしながらも今日的な問題意識を反映した、暗喩に満ちた物語性豊かな作品によって活躍の場を広げていく。2000年代に入ると細密画の世界にデジタル技術を導入したアニメーションなど映像作品に新境地を開き、アイルランド現代美術館（2007年）やビルバオ・グッゲンハイム美術館（2015年）など世界各地で個展を開催、ヴェネチア・ビエンナーレ（2011年、2015年）、イスタンブール・ビエンナーレ（2013年）など欧米、アジア、中東の重要な現代美術展にも招かれ、その旺盛な制作活動と多様な文化が混在する独創的な表現世界が認められ、2003年にニューヨーク市長表彰、2005年にパキスタン政府栄誉賞を受けるなど、国際的な評価を高めた。また、日本でも福岡アジア美術トリエンナーレ2009、東京都現代美術館の「トランスフォーメーション」展（2010年）などに出品し、その名を知られた。

シカンダー氏は、軍事政権下のパキスタンでムスリム女性としての困難を乗り越え、衰退した伝統工芸、土産物とみられていた細密画に取り組んで、そこに現代社会が直面する問題、すなわち政治、民族、宗教、ジェンダー、移民などをめぐる様々な分断の姿と和解への希求を描き出し、ビデオやデジタル・アニメーションなどの現代的な手法も融合した豊かな「ネオ・ミニアチュール（新細密画）」の世界を作り上げた。そのあとには、多くの女性を含む南アジアの細密画家たちが続き、新たな表現世界を形成している。

世界が抱える困難な課題を、南アジアの伝統を踏まえ刷新しつつ、今日的な造形によって暗喩的に描き出し、国際的に高い評価を得るシカンダー氏の表現世界は、アジアの若手作家たちを鼓舞している。このように南アジアの代表的な女性アーティストとして意欲的な活動を続けるシャジア・シカンダー氏は、まさに「福岡アジア文化賞 芸術・文化賞」にふさわしい。

第32回 福岡アジア文化賞

授賞式

日時：2022年12月22日（木）18：45～19：55　会場：福岡国際会議場　メインホール
形式：会場開催、オンライン（アーカイブ）配信

式次第

オープニング（映像）	
受賞者登壇・紹介	
主催者代表挨拶	福岡市長　髙島 宗一郎
おことば	秋篠宮皇嗣殿下
選考経過報告	九州大学総長　石橋 達朗
受賞者の功績紹介（映像）	
贈賞	福岡市長　髙島 宗一郎 （公財）福岡よかトピア国際交流財団理事長 谷川 浩道
受賞者スピーチ・インタビュー	
花束贈呈	
大賞受賞者演奏動画	

希望に満ちた壮大な音楽と、プロジェクションマッピングと連動したオープニング映像で、華やかに幕を開けた福岡アジア文化賞授賞式。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、昨年は、海外の受賞者はオンライン参加となりましたが、今年は3年ぶりに全受賞者が会場に集い、秋篠宮皇嗣同妃両殿下のご臨席を仰ぎ開催。感染予防対策を徹底し、招待者のみ出席の上で執り行われました。

式典では、初めに受賞者が紹介され、大賞の林英哲氏、学術研究賞のタイモン・スクリーチ氏、芸術・文化賞のシャジア・シカンダー氏がステージに登場。会場は温かい祝福の拍手に包まれました。

次に、主催者を代表して髙島宗一郎福岡市長が挨拶。「時代の変革期を迎えるなか、持続可能で多様性のある社会の実現が求められているからこそ、アジア地域の多様な文化と価値を広く伝える福岡アジア文化賞の役割は、これまで以上に重要なものとなってくる」と述べました。続いて秋篠宮皇嗣殿下より、お祝いのおことばを賜りました。

その後、福岡アジア文化賞審査委員会委員長である石橋達朗九州大学総長が、今回の選考経過を報告。受賞者の素晴らしい功績が映像で紹介され、髙島市長と谷川浩道（公財）福岡よかトピア国際交流財団理事長より、賞状と記念のメダルが授与されました。

受賞者スピーチでは、それぞれの受賞者から感謝と喜びの声が伝えられ、続くインタビューでは、和やかな雰囲気の中、活動や研究の歩み、大切にしてきた思い、これからの抱負などが語られました。

再び受賞者全員が登壇し花束が贈呈された後、大賞の林英哲氏の太鼓演奏を上映。映像ではありましたが、その迫力あるパフォーマンスは見るものを圧倒し、第32回福岡アジア文化賞授賞式は感動のうちに幕を閉じました。

プロジェクションマッピングを用いたオープニング

受賞者登壇

髙島市長による主催者代表挨拶

石橋九州大学総長による選考経過報告

受賞者の功績紹介の様子

大賞の林英哲氏への贈賞

学術研究賞のタイモン・スクリーチ氏への贈賞

芸術・文化賞のシャジア・シカンダー氏への贈賞

大賞受賞者演奏動画の様子

秋篠宮皇嗣殿下おことば

本日、第32回福岡アジア文化賞授賞式が開催されるにあたり、大賞を受賞される林英哲氏、学術研究賞を受賞されるタイモン・スクリーチ氏、そして芸術・文化賞を受賞されるシャジア・シカンダー氏に心からお祝いを申し上げます。

一昨年は、COVID-19の感染拡大によって授賞式が延期になり、昨年はオンラインを併用した開催となりました。したがいまして、全ての受賞者をお迎えして開催される授賞式は3年ぶりのこととなります。今日、皆様と共に出席し、この場において受賞者それぞれの活動や研究について直接お話を伺うことができますことを誠に嬉しく思います。

それとともに、感染症の収束が見られない中、授賞式の開催に向けて尽力をされた皆様に、深く敬意を表します。

「福岡アジア文化賞」は、古くからアジア各地で受け継がれている多様な文化を尊重し、その保存と継承に貢献するとともに、新たな文化の創造、そしてアジアに関わる学術研究に寄与することを目的として、それらに功績のあった方々を顕彰するものです。

私自身、アジアの国々をたびたび訪れ、多様な風土や自然環境によって創り出され、長い期間にわたって育まれてきた各地固有の歴史や言語、民俗、芸術など、文化の豊かさと深さに関心を持ちました。そして、それらを記録・保存・継承するとともに、さらに発展させていくことの大切さと、アジアを深く理解するための学術の重要性を強く感じてまいりました。そのいっぽうで、私たちはCOVID-19の感染拡大により、人と人との交流が制限され、各地の文化に直接触れることが難しい状況になり得ることを経験いたしました。これらのことから、本賞がアジアの文化の価値とそれらについての学術的な側面を伝えていくことは、大変意義の深いことと考えます。

また、本賞のこれまでの輝かしい受賞者の中には、アジア地域に限らず世界各地で活躍されている方が多くおられますが、このことは、本賞がアジアの文化とその価値を世界に示していく上で、顕著な役割を果たしてきたものと申せましょう。

本日受賞される3名の方々の優れた業績は、アジアのみならず広く世界に向けてその意義を示し、また社会全体でこれらを共有することによって、次の世代へと引き継ぐ人類の貴重な財産になるものと思います。

おわりに、受賞される皆様に改めてお祝いの意を表しますとともに、この「福岡アジア文化賞」を通じて、アジアの各地に対する理解、そして国際社会の平和と友好がいっそう促進されていくことを祈念し、授賞式に寄せる言葉といたします。

大賞　林 英哲

人種を越えて人々を前向きにさせる太鼓の音を信じて

本日は秋篠宮皇嗣同妃両殿下のご臨席を賜り、このような授賞セレモニーを催していただきまして本当にありがとうございます。この栄えある「福岡アジア文化賞・大賞」という栄誉を頂きまして、審査にあたられた関係者の皆さま、スタッフの皆さま、この賞を長く続けてこられた福岡市と、なにより福岡市民の皆さまに、心より厚く厚く御礼を申し上げます。

私は日本の太鼓を使って、半世紀にわたって新しい表現を模索し続けてきましたが、自分の仕事が社会のどこにも響いていないような気がすることも多々あり、大袈裟に言えば闇の中を手探りで歩いて来たような、そのような歩みでした。まさか51年後にこのように光を当てて頂き、励まして頂けることがあろうとは、夢にも思いませんでした。

私は、若い頃、太鼓を打ちながら、不思議な体験をしたことがあります。太鼓の響きがまるで宇宙からの声のように感じられ、大音量の中で自分の生き方を全肯定されたような、不思議な感覚に包まれたのです。

人間は生まれ出るまでは、母親の胎内で心音に包まれながら育ちます。その音は、私の打つ太鼓の音の周波数とほぼ同じだということを知って、戦慄するほど感動しました。その音は、人種とか肌の色の違いがないということ、そのような経験を通して、世界中の人種を越えたすべての人が生まれる前に体感していた、その音を今日的な音楽表現にできないか、と考えて歩き続けたのが私の道です。

アジアでは古来、大太鼓は、大宇宙や、太陽や、天と大地などを象徴するものとして扱われてきました。そういう古代の人々の壮大なイメージも演奏によって現代によみがえらせたいと思いました。そのようにして始めた私の太鼓の奏法やリズムが、いつしか日本のみならずアジア諸国や、世界の国々にまで広まって行ったのは思いがけないことでした。

この福岡アジア文化賞の大賞を9年前に受賞された医師の中村哲さんは、ご自身を「セロ弾きのゴーシュ」となぞらえておられましたが、物語のなかのゴーシュの弾くセロと同様に、太鼓の音も人々を慰め、前向きにさせる力があることを私は信じています。中村先生の命がけの活動や、偉大な功績には私などはるかに及びませんが、世の中の風が激しく吹きすさぶ現代であればこそ、困難に陥っている人々を前向きにさせたり励ましたりする音は絶対必要で、今後も微力ながらそのような表現を目指して歩んで行こうと思います。この「福岡アジア文化賞大賞」がなにより大きな支えになります。本日は本当にありがとうございました。

インタビュー

質問：太鼓を通して新しい表現を模索してきた過程は、どのようなものでしたか。
林氏：太鼓はもともと祭りのお囃子、踊りや歌の伴奏役として、伝統的に郷土芸能の中で使われてきました。太鼓だけを取り出して演奏の主役とするのは、私が19歳のときに所属したグループが最初に始めたことです。前例がなかったので、皆さんに楽しんでいただける舞台芸能として成立させるためには、創作を加える必要がありました。手探りでスタートした頃が、一番大変でしたね。

質問：林さんの活動には、一貫した強い芯を感じます。その原動力は何ですか。
林氏：太鼓を職業にするのは困難が多く、肉体的にも非常にきつい面があります。それでも続けてこられたのは、太鼓はお母さんのお腹の中で誰もが聞いていた音であり、いろんな意味で人間を鼓舞、煽動してくれるからだと思います。世界中で演奏をしていると、涙を流して聴かれる方が結構おられます。自分自身が打つ音に励まされ、感動してくださるお客様の声にたくさんの力をいただいています。

質問：今後実現したいことがあれば、ぜひ教えてください。
林氏：今では世界中で太鼓を打つ人が増えてきました。アメリカの大学にも太鼓クラブができ、スタンフォード大学の音楽学部では和太鼓が授業になって、プロの打ち手も出ています。そのような人達にも指導をしていますが、これまでは、きちんと体系化した太鼓のメソッドがなかったので、日本文化を表現しながら新しい表現ができるよう、指導法を本に書くなど形にしたいと思っています。

学術研究賞　タイモン・スクリーチ

歴史ある国際交流の地・福岡で江戸研究を認められた感謝を込めて

秋篠宮皇嗣同妃両殿下、福岡市長、そしてお集まりの皆さま、こうして2022年の福岡アジア文化賞の学術研究賞を受け取ることになりましたことは身に余る光栄です。

多くの世界的に有名な研究者がこれまでにこの賞を受賞されています。私自身がそうした先輩たちの仲間入りができるとは思っておりませんでした。昨年、私は30年間勤めたロンドン大学を辞め、京都の国際日本文化研究センター（日文研）での仕事に就くために日本に参りました。これは私の人生のなかでも、大きな転換点でした。初めての転職、そして日本への移住と、大きな変化があった一年でしたが、その時期を締めくくるかのように、この賞を頂くことになったのは最高の喜びです。

私が江戸の研究を始めた1985年頃は、江戸といえばまずは「鎖国」という言葉が思い浮かんだものでした。もちろん江戸時代には様々な制約がありましたが、「鎖国」という言葉は江戸を定義するに相応しい言葉ではありません。この言葉自体がかなり国際的な用語なのです。「鎖国」という言葉は実はオランダ語からの訳語であり、元のオランダ語は英語からの、そのまた元の英語の言葉はドイツ語とラテン語からの訳語でした。

福岡は過去何世紀にも渡って国際交流の地として知られています。まずは大陸への架け橋として、そして東南アジアとの交流の地として、さらにその先にはヨーロッパもあります。今日ではグローバル・ジャパニーズ・スタディーズと呼ばれる分野に携わってきた者にとって、福岡の人々からこの賞を受賞できたことは、格別に光栄だと思っております。ありがとうございます。

インタビュー

質問：数ある学問の中で、日本を対象に取り組もうとしたのはなぜでしょうか。
スクリーチ氏：大学で日本語を専攻したのがきっかけです。当時はちょうど日本の高度経済成長期で、これから日本語ができる人が必要になると言われました。そのとき応援してくれたのが父でした。父が終戦直後に軍人として3年間日本に暮らした際、苦しいときでも堂々と生活する日本人に感動して、日本を大好きになったそうです。その父から日本のことを考えるように言われたことが、私の出発点となりました。

質問：視覚的な資料をもとに、江戸文化を研究する魅力はどのようなものですか。
スクリーチ氏：江戸時代の言葉は現代日本語と違って分かりにくい面がありますが、美しい絵や彫刻は誰もが感動を共有できるところです。研究の出発点として、目から得られる刺激から考えたいと思いました。なぜなら日本学を専攻して江戸美術展を観て、目から鱗が落ちたような大学生のとき、ロンドンで開催されたからでした。江戸美術をやりたいと思いましたが、イギリスでは指導できる教授がいなかったので、アメリカに留学して博士課程に入りました。

質問：今後はどのようなことにチャレンジしたいですか。
スクリーチ氏：これからは全国の東照宮について研究したいと思っています。東照宮を選んだのは、非常に総合的なモニュメントであり、建築、彫刻、絵画、巡礼地など多くの魅力があるからです。東京から京都に移り住み、日光は少し遠くなったと感じていますが、現在は日光だけではなく全国の東照宮ネットワークについて勉強しているところです。

芸術・文化賞　シャジア・シカンダー

アートで固定観念を覆し若い世代に信念を伝える

福岡アジア文化賞の歴史に名を連ねることができたことを大変光栄に思います。アジアの歴史と伝統、革新に敬意を表する、この重要な賞の創設に、福岡市市民の皆様が信念を持ってくださったことに心から感謝いたします。秋篠宮皇嗣同妃両殿下のご臨席に深く感謝申し上げます。私はこれまで受賞された方々の偉業を辿り、尊敬するとともに、感謝いたします。また、スクリーチ教授と林様の受賞にお祝い申し上げます。

1980年代半ばから、私の作品は中央・東南アジアの写本絵画の伝統を、現代の国際的な芸術の実践と対話させることによって「ネオ・ミニアチュール（新細密画）」として知られる視覚芸術の形態を開拓してきました。30年以上に渡って私は新しい手法と技術を通した研究・拡大に取り組んでまいりましたが、それはヨーロッパ中心の美術史を多様化させたいと思う私の熱望から生まれたものです。

幼い頃、私は父の寛大で優しい心に触発されました。父は私に、リスクを冒しても自分の限界を押し広げ、やり続け、作り続けることを教えてくれました。私は父から他者に関心を持ち、目的を持って人生を送ることで想像力を培うことを学びました。私の師匠、書籍、学者、詩人、アーティストたちからも学ぶことで創造的に育まれることができ、私は幸運でした。

芸術は生き、存続し、感動を与えます。まるで人生そのもののように乱雑で複雑です。それは知識の構築に関わるものです。私たちの文化、歴史、そして価値観をどのように近づけ、再現し、再演するかによって私たちが信じるものは変化し、進化します。もし私たちが表現、ジェンダー、人種、移民、馴染みのないものに対する固定概念を覆すために、アートやメディアを利用すれば、私たちが次世代に伝える信念は若者を触発し、私たちが生きる複雑且つダイナミックな世界を反映することになるでしょう。このような精神の模範が福岡アジア文化賞であり、私はこの賞を、アジアの知識、歴史、革新性を認識し称える、若い世代に捧げます。

インタビュー

質問：細密画という伝統絵画に、デジタルアートを取り入れたのはなぜですか。
シカンダー氏：私はアーティストとして、新しいテクノロジーの想像力に惹かれていました。そして、私が研究を続けていたアジアの伝統絵画は、非常に知性的で古さを感じさせないものだと思い、これらを融合することで、アートを予期しないものに展開していけると考えたのです。また、歴史をさまざまな視点から取り入れ、どのようにストーリーを伝えていくか、ということも大事にしています。

質問：お父さんについて、象徴的なエピソードを教えていただけますか。
シカンダー氏：私が子どもの頃、父はよく本を読んでくれました。文章をそのまま読むのではなく、自分の想像力を交えた物語を伝えてくれたのです。まるで劇画のようなイメージで、音や体の動きも含めながら。本によって想像力を培うことができたのは、父のおかげです。大人になった今も、本を通じて私はいろんな刺激を受けており、羽を持ったかのように、飛び出すことができるのです。

質問：芸術を通して、次の世代に何を伝えたいですか。
シカンダー氏：芸術とは、私たちがストーリーを伝える手段です。そして未来の人々のための場所をつくっていくことが必要になってくると思います。あなたは何者なのか、社会の中でどのように表現していくか、自分自身に問いかけ、強い信念を持つことで、自分だけでなく、自分以外の人生にも影響することに気づいてほしいです。また、広く興味を持って関わることで、芸術を変える力があることも伝えたいです。

大賞 市民フォーラム

林　英哲

日本／太鼓奏者

「魂の響き―林 英哲・太鼓の世界」

- 実施日／2022年9月28日(水)19:00～20:30
- 形　式／会場開催、オンライン(アーカイブ)配信
- 会　場／電気ビル共創館 みらいホール
- 参加者／会場 298名、オンライン 762名
- 協　力／(公財)福岡市文化芸術振興財団

第1部 レクチャー・デモンストレーション

日本の太鼓、英哲の太鼓

ワールドミュージックとして初めて世界に認知された日本の太鼓音楽、その創成期から最先端をつねに走り続けてきた林英哲氏。第1部では、日本の太鼓の伝統と林氏が新たに生み出した表現の独創性について、英哲風雲の会メンバーの実演を交えながら本人が解説していきます。

一番古い日本の太鼓は古墳時代といわれ、太鼓とバチを持った埴輪が発見されています。現在、我々が使っているような太鼓は、5～6世紀に仏教や雅楽と共に伝わってきました。平安時代に豊作祈願の田楽とともに太鼓が広がり、室町時代には太鼓を打ちながら歌って踊る田楽法師が人気を博します。その後、能の世界で大型の太鼓が消えていくとともに、鼓が登場し、芸能として洗練されていきました。

江戸時代には火事の緊急信号として利用され、周波数が長くて遠くまで届く太鼓の音は効果的でした。その後、歌舞伎ではサウンドエフェクトとして、舞台袖で役者の動きに合わせて鳴らされました。

太鼓が舞台芸術として進化したのは戦後です。ジャズの影響もあり、太鼓をたくさん並べて打つ組太鼓が生まれましたが、あまり普及はしていませんでした。

こうした歴史を背景に、自分自身の歩みについて語った林氏。太鼓を始めたのは51年前、美術学校で学んでいたときでした。中学時代からドラムをしていたこともあり、新潟県の佐渡島に創設された太鼓チームに誘われ、厳しい合宿生活を送ることになります。長距離を毎日走り込み、自己鍛錬を続けながら、伝統的な祭りばやしを研究して舞台用の迫力ある曲にアレンジしたり、大太鼓を正面から打つスタイルを生み出したり、それまでの常識を破る太鼓芸能を確立していきました。ボストンマラソン完走後の太鼓パフォーマンスを皮切りに、オーケストラと数多く共演。1982年にグループが解散した後は、前例のないソロの太鼓奏者となり、演奏、作曲、指導などさらに活動を広げてきました。

脇役だった太鼓に光を当て、伝統を生かして「英哲の太鼓」を築いた林氏。新しい芸能を切り拓き、古希を迎えた今も挑戦を続ける姿が、大きな感銘を与える講演となりました。

第2部 スペシャルライブ

組曲「澪(みお)の蓮(はす) 2022」

第2部では、林氏と英哲風雲の会メンバー4名によるライブ演奏が行われました。組曲「澪の蓮」は、林氏が創作した太鼓ドラマともいうべき劇的舞台作品。自身が影響を受けた芸術家をテーマにした作品の中で、4作目となる組曲構成の大作です。朝鮮半島の自然と文化を愛し、40歳の若さで世を去った林業技師・浅川巧の人生をテーマに、2001年に発表されました。国内ツアーはもとより海外公演でも演奏された記念すべき作品です。

市民フォーラムでは、記念ライブとしてスペシャルヴァージョンで演奏。林氏が舞台中央の大太鼓に向かって打ち始めると、会場は凛とした空気に包まれ、力強い太鼓の音が響きわたりました。英哲風雲の会の太鼓奏者との見事なアンサンブルによって壮大な世界が広がり、照明による光と影の演出も美しく、神聖で迫力ある演奏で観客を魅了しました。演奏後は多くの人が立ち上がり、拍手が鳴りやみませんでした。

拍手に応えて再び舞台に立った林氏は、15年ほど前にアメリカ・オハイオの芸術活動プロジェクトで子どもたちに太鼓を教えた経験を話し、その頃に作った曲を披露し、公演の幕を閉じました。

学術研究賞 市民フォーラム

タイモン・スクリーチ

英国／美術史家

「神仏となった徳川家康―美術と建築からみる東照宮信仰」

- 実施日／2022年9月28日(水)15:00～17:00
- 形　式／会場開催、オンライン(アーカイブ)配信
- 会　場／福岡市美術館 ミュージアムホール
- 参加者／会場 139名、オンライン 647名
- 協　力／福岡市美術館

第1部 基調講演

徳川家康は何故、どのようにして日光に神仏として祀られたのか

江戸を主たるフィールドとして、広くビジュアル情報として残された歴史を解明し続ける日本研究者・スクリーチ氏。基調講演では、徳川家康が何故、どのようにして東照大権現として祀られるようになったのか、そして徳川家康を祭神に祀る日光東照宮について、美術と建築を通して歴史の深層に迫りました。

スクリーチ氏は絵画や写真をスクリーンで映しながら、流暢な日本語で解説を始めました。1616年に死去した家康は、当初、現在の久能山東照宮（静岡県）の地に遺体が葬られたといわれます。富士山、三保の松原が近くにある美しい場所で、スクリーチ氏が実際に見た現地の様子も語られました。

翌年、家康の遺体は日光に移され、社が建てられました。日光が選ばれたのは、江戸の真北に当たり、権力や守護を意味する重要な方角だったからです。家康が神仏化されたのは、先に亡くなった豊臣秀吉が豊国大明神として祀られた影響もありました。さらに約20年後、孫にあたる3代将軍の家光が大規模な改修を行い、多額の資金を投じて豪華な日光東照宮を建設します。建築様式の変遷や特徴について、京都にある秀吉の霊廟とも比較しながら説明しました。

最後に、日光の特徴とされる灯籠について紹介。東照大権現の本地仏は薬師如来であり、病を治す仏である薬師如来の前では、昔から灯籠を使った儀式が行われてきました。そのため、日光には数多くの灯籠があります。最初に灯籠を献上したのは伊達政宗で、ポルトガルの銅製でした。家康の孫・東福門院（徳川和子）が献上したものや、鎌倉時代の有名な鬼彫刻の灯籠を模したものもあります。オランダからは、シャンデリア型など珍しい3つの灯籠が贈られました。これは、世界から家康が神様として認められたことを示す象徴ともいえます。

誰もが知る歴史上の人物・徳川家康を、神仏という観点からひもとき、日光の建築や美術と合わせて描き出す興味深い講演となりました。

第2部 対談

江戸学の現在を語る

スクリーチ氏と長年交流があり、著書の共訳や解説を手掛けた江戸研究者・田中優子氏と対談が行われました。田中氏は、スクリーチ氏の著書の中から3冊を紹介されました。『大江戸視覚革命』は、江戸時代にオランダから入ってきた望遠鏡、眼鏡、顕微鏡などの視覚装置(レンズ)が人々の視覚に変化を及ぼし、新たな民衆文化を生んだ歴史について書かれた本です。他にも、松平定信をテーマにした『定信お見通し』、解剖学を斬新な視点で描いた『江戸の身体(からだ)を開く』を挙げ、内容の面白さを伝えるとともに、スクリーチ氏の研究を「文学が無視し、歴史が無視し、美術が無視してきた場所に、勇気を持って分け入ってきた」と評価し、その素晴らしい功績を称えました。

スクリーチ氏は美術史、田中氏は文学という専門領域を越えて、研究を広げてきました。新分野を開拓する原動力について、スクリーチ氏は「仲間が非常に重要だと思います。アイデアを交換しながら討論し、自分の考えを広げていくことが大切」と話しました。田中氏は、湧き上がる好奇心のままどんどん本を読み、知識を積み重ねてきた経験を語りました。

最後に、「江戸文明は東京だけではなく地方にもある」ことが伝えられ、博物館、絵画、古地図、庶民生活に関する資料などを通して共通点を探し、福岡の中で江戸とのつながりを見つけていく楽しみ方も提案されました。

対談者 **田中 優子**
（法政大学名誉教授、法政大学江戸東京研究センター特任教授）

コーディネーター **河野 俊行**
（九州大学理事・副学長・主幹教授、イコモス名誉会長）

芸術・文化賞 市民フォーラム

シャジア・シカンダー
米国／アーティスト

**「伝統を越えて世界と向き合う
—シャジア・シカンダーの歩み、そしてアートに込めた思い」**

■ 実施日／2022年9月30日(金)18:30〜20:20
■ 形　式／会場開催、オンライン(アーカイブ)配信
■ 会　場／福岡アジア美術館 あじびホール
■ 参加者／会場 68名、オンライン 406名
■ 協　力／福岡アジア美術館

第1部　基調講演
パキスタンから米国、そして世界へ 軌跡とアートに込めた思い

ムガル朝の伝統に連なる細密画の世界を、今を生きる魅力的な造形として蘇らせたシャジア・シカンダー氏。第１部では、世界で活躍するアーティストとなった軌跡と、アートに込めた思いが語られました。

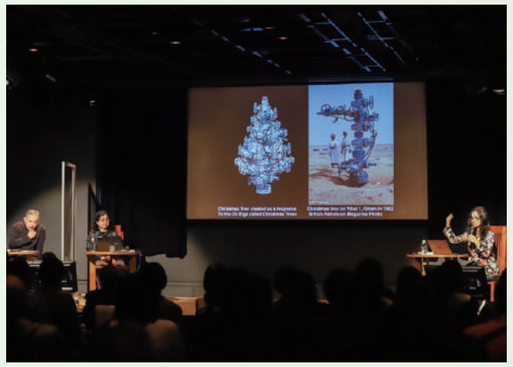
はじめにコーディネーターの後小路雅弘氏が、シカンダー氏の幼少期からアーティストになるまでの歩みを描いた絵本を紹介。そして、アーティストになった経緯、アメリカでの経験、細密画の新しい表現などに関して後小路氏より質問が出され、シカンダー氏が答えていきます。

パキスタンで生まれ育ち、大家族に囲まれて伸び伸びと育ったシカンダー氏。軍事独裁政権下で細密画と出合い、絵を学ぶためラホール国立芸術大学に入学。従来の方法に独自のアイデアを加え、新しい表現法に挑戦してきました。細密画は南アジアで生まれましたが、植民地だったため本物は国内に残っていません。海外で初めて原画を見たときは感動し、「命にあふれ、生き生きとした姿を見ることができた」と語りました。

1990年代後半からアメリカのロードアイランド・スクール・オブ・デザインで学び、さまざまな問題に直面しました。特に「パキスタン人の女性の作品」という色眼鏡で見られることに疑問を感じ、既存の細密画の枠組みから飛び出そうと考えるようになります。透明な紙を使ったり、紙に描いた作品を彫像にしたり、多様な表現を追求しました。シカンダー氏は、細密画を通して植民地の歴史と向き合い、社会の先入観や固定観念とも闘いながら、常識を超える“境界のない”作品を発表してきました。

新しい手法として、細密画にデジタルアニメーションを取り入れ、時間や空間の変化を表現するようになり、会場内でも実際に映像作品を投影し、細密画に描かれたモチーフがどんどん増えたり減ったりしながら姿を変え、想像を超えた世界が広がる作品を紹介しました。人と自然、天と地が溶け合っていくようなイマジネーションに満ちた作品に、アートへの思いが込められていました。

第2部　対談
多様な価値観に揺れる世界に アートはどのように応えるのか



第２部では、長年にわたり女性アーティストの発掘と再評価を続けてきた美術史家・小勝禮子氏を加え、現代のアートについて語り合いました。小勝氏は、企画開催をしたアジア女性画家の展覧会について話した後、海外に拠点を置く日本女性アーティストの中から、ドイツで活躍するイケムラレイコ氏、塩田千春氏を紹介。海外で活動を始めた経緯、故国の文化の影響、活動状況や作品などについて伝えました。

対談の後半では、「海外に拠点を置くことでどんな影響があったか」という質問に答えたシカンダー氏。故国か外国かという二者択一ではなく、拠点は循環的なものだという考えを伝え、「どこにいても、私の故郷とは絵を描くこと。自分のことを世界市民だと呼びたい」と話しました。

また、コラボレーションを大切にして、さまざまな国の人たちと協力しながら作品を展開してきた様子を紹介。福岡市内にあるアーティストカフェで展示中の作品「≪視差≫Parallax」は、自然、歴史、産業などさまざまなものから着想を得て生まれたと語り、この作品は壮大な時間軸と多様な価値観を抱擁するダイナミックなアートで観客を魅了しています。最後に「パキスタンアーティストの先導者として、アーカイブから世界へと細密画を広げていきたい」と笑顔で抱負を語りました。

※アーティストカフェでの展示は終了しております。

対談者 **小勝 禮子**
（美術史家）

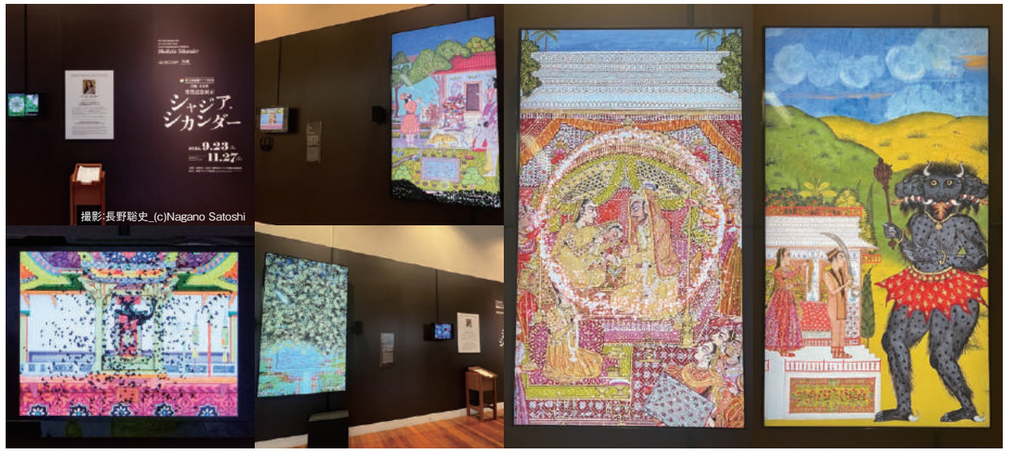
コーディネーター **後小路 雅弘**
（北九州市立美術館館長）

第32回 芸術・文化賞受賞記念展示

福岡アジア文化賞芸術・文化賞の受賞を記念し、シャジア・シカンダー氏の作品展示を行いました。

主催／福岡市、(公財)福岡よかトピア国際交流財団　協力／福岡アジア美術館

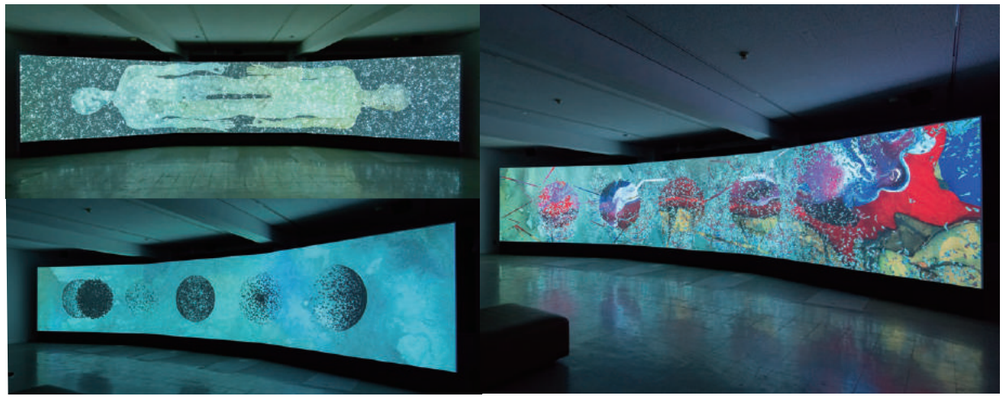
○会場／福岡アジア美術館　7階ロビー
展示期間／2022年9月23日(金)〜11月27日(日)(休館日除く)
作品
《SpiNN》
2003年　アニメーション(6分30秒)　福岡アジア美術館所蔵
《混乱の歓び》Disruption as Rapture
2016年　アニメーション(10分7秒)



撮影:長野聡史_(c)Nagano Satoshi

○会場／Artist Cafe Fukuoka ギャラリー(旧舞鶴中学校)
展示期間／2022年9月23日(金)〜11月27日(日)(休館日除く)
作品
《視差》Parallax
2013年　3チャンネルのアニメーション(15分30秒)　音楽:ドゥ・ユン

FaN
Fukuoka Art Next


撮影:長野聡史_(c)Nagano Satoshi

大賞　林 英哲

日本／太鼓奏者

■実施日／9月26日(月)14:15～15:45　■会場／内浜中学校

学校の体育館ステージ上に、ずらりと和太鼓が並んだ状態で始まった学校訪問。体育館に集まった300名以上の3年生を前に、講演と演奏を行った林氏。19歳で太鼓グループに入ったきっかけや、太鼓奏者として独立した経緯などを話した後、日本の太鼓の歴史について、時代ごとに太鼓の使い方が変化してきた様子や、林氏が創作した太鼓音楽の特徴について、英哲風雲の会のメンバー4名と共に実演を交えながら、分かりやすく解説しました。

後半は、海外公演でも高い評価を受けている曲「モノクローム」を演奏し、会場は迫力ある太鼓の音色に包まれました。質疑応答では、生徒から次々と手が挙がり、積極的に質問が寄せられました。日々の体力づくり、公演時の緊張のほぐし方、西洋の打楽器と和太鼓の演奏方法の違いなど、林氏の豊かな経験を通して語られる言葉に、生徒たちは興味深く耳を傾けていました。林氏の太鼓に向き合ってきた人生を聞き、進路選択を間近に控えた3年生にとって、これからの人生に向き合うきっかけとなりました。

最後に生徒代表が「伝統の太鼓を新しい形で世界に広げてきたことが、とても心に残りました」と、感想とお礼を伝えました。

また、林氏が学校を後にする際には、演奏に感動した生徒が急きょ手作りの感謝状を手渡すという一幕もあり、林氏の真摯な生き方と太鼓の響きに大きな刺激を受け、感動にあふれる豊かな時間となりました。

生徒の声

- 太鼓の振動が体を通ったのをすごく感じて、エネルギーを体感した。
- 太鼓の迫力のある面や小さな音を使って、様々な様子を表していたところが印象的だった。
- 日本の文化を世界で通用する形に磨き、初めてのことをやってのけるような行動力に感動した。
- 自分の道を切り開いて生きているのがかっこよくて素晴らしいと思った。
- 太鼓の今の演奏が戦前まではなかったことに驚いた。
- 色々な太鼓の音や太鼓の歴史を知り、もっと和太鼓について知りたくなった。
- 和太鼓の深さや音色にとても感動しました。

学術研究賞　タイモン・スクリーチ

英国／美術史家

■実施日／9月29日(木)13:45～15:35　■会場／福岡女子高等学校

視聴覚室に集まった国際教養科の生徒たちに、歓声と拍手で迎え入れられたスクリーチ氏。「たくさんのハッピースマイルに迎えられて、とても嬉しい」という挨拶の後、「江戸時代文化の国際主義」をテーマに、第1部の講演が行われました。いわゆる「鎖国」下における江戸の歴史の中で、長崎の出島にて行われた諸外国との貿易の様子や、外国人が江戸の将軍へ謁見に向かう「参府」の道中で深まっていく当時の人々の国際理解について、時にユーモアを交えて分かりやすく説明。国内外の様々な浮世絵や肖像画、風景画に描かれている物事に着目して、当時の人々の考え方や生活など、歴史の授業ではなかなか学ぶことができない隠されたストーリーを読み解いていく興味深い内容に、生徒たちは惹きつけられていました。

第2部では、グループディスカッションの時間が設けられ、生徒たちは講演の感想や質問をまとめて英語で発表。日本文化に興味を持ったきっかけや、国際交流によって異なる言語が各国に定着した例などについて質問し、活発な意見交換が行われました。最後に、19歳で初めて来日したスクリーチ氏自身の経験談を交えて、「情熱があり自由な気持ちを持つ皆さんのような若い人たちに、ぜひ旅をしてほしい。言語は、必要に迫られたときが一番の学び時だからです」と、外国語でのコミュニケーションや異文化への正しい理解を目指す国際教養科の生徒たちの心に響く激励のメッセージが送られました。

生徒の声

- 「言語習得には、その言語の地域へ行くのが一番」との助言で、自分の進路に自信を持てた。
- 日本人として日本についてもっと知り、海外の方へ発信したいと思った。
- 当時の絵画によって、背景や人々の生活の様子を知ることができた。
- 外国人が到着した出島の話だけでなく、道中の京都や江戸での謁見の話が興味深かった。
- アジアの文化は深く学ぶととても楽しそうで、またお話を聞いてみたいと思った。
- 日本だけでなく、他国の文化や歴史にもっと触れていきたいと思った。

芸術・文化賞　シャジア・シカンダー

米国／アーティスト

■実施日／9月29日(木)13:25～15:15　■会場／福岡雙葉高等学校

講堂に集まった中学、高校の両校生徒たちを前に、花束と大きな拍手で歓迎を受けたシカンダー氏。自身の作品をスクリーンに投影し、アイデンティティに関する考え方や、異文化とその歴史をどのように作品に盛り込んでいるか、解説を交えて講演を行いました。シカンダー氏は、人種や宗教におけるカテゴリーが多様になればなるほど考える要素が増え、作品を広範囲に繋がりがあるものへ昇華し、多様な見方で理解してもらえるようになる、と語りました。講演後、福岡アジア美術館で展示中の映像作品『混乱の歓び』の一部分が披露され、生徒たちは幻想的な音楽と映像美の世界観を堪能しました。

後半では、生徒代表グループからシカンダー氏に対し質問がなされ、故郷パキスタンから米国へ渡った経緯や、人生で最も大事なことなどが語られました。その後、女性アーティストが対峙するジェンダー格差問題、政治的・経済的弱者が経験する不平等の問題など数多くのテーマについて生徒とシカンダー氏の熱心な意見交換が行われました。

最後に「まず自分自身を理解し、所属するコミュニティーについて考えることが重要。一丸となり取り組むことで、問題に対する解決方法を見出すことができる。また、常に限界を押し上げ、学ぶ気持ちを忘れず、色々なことに挑戦し、成長しようと心がけてほしい。」とメッセージが送られ、生徒からの温かい拍手で幕が閉じました。

※福岡アジア美術館での展示は終了しております。

生徒の声

- 福岡アジア文化賞を受賞し世界で活躍している方のお話を聞けるとても貴重な機会になった。
- 社会における問題について考える中で、アートというものに置き換えてその問題を表現するという新しいものに出会い感激した。
- 努力や諦めないことの大事さを知る事ができる授業だった。
- 南アジアの独特な美術を見ることで、世界の広さや価値観の違いを感じた。
- 今自分が人のために出来ることは何かを考え、ひとつずつ行動に移していきたいと思った。

歴代受賞者招聘イベント

プラープダー・ユン氏による映像セミナー
～タイと福岡の制作の現場から

■ 実施日／2022年10月29日(土)13:00～16:30
■ 形　式／会場開催、オンライン(アーカイブ)配信
■ 会　場／福岡アジア美術館 あじびホール
■ 参加者／会場73名、オンライン194名(1月末時点)
■ 主　催／クリエイティブ福岡推進協議会、
　　福岡市、(公財)福岡よかトピア国際交流財団

第31回 芸術・文化賞受賞者
プラープダー・ユン
(タイ／作家、映画作家、アーティスト)

モデレーター **神保 慶政**
(映画監督)

吉田 チロウ
(アニメーション作家、画家)

荒木 聡太郎
(映像作家、メディアアーティスト)

宗 大介
(映像作家)

第1部

タイの映像制作の現場から

タイを代表する作家の一人であり、評論家、脚本家、グラフィックデザイナーとしても活躍するプラープダー氏。今回は映画監督として登壇し、クリエイティブセミナーが開催されました。

第1部では、プラープダー氏が監督・脚本を担当した短編映画『Transmissions of Unwanted Pasts(不要な過去たちの発信)』を上映。上映後は映画監督の神保慶政氏と対談し、各シーンに込めた思いや、映画制作をするうえで大事にしていることを語りました。

映画の中で、非日常と日常、昼と夜、狭い室内と広い屋外など、対比する場面を効果的に使っている点に神保氏が触れると、「スペースの変化は実験的に行っている。人々がどういう意思決定をし、境界線を超えるかという点に興味がある」と話したプラープダー氏。

時間や予算という制約が伴う映画制作において、一番大切にしているのは「仲間」。カメラマン、アシスタントなど友人に支えられてきた経験を語られ、時間・予算・人の3つのバランスが難しいが、映画づくりに重要であることを伝えました。

神保氏が「東南アジアと日本の映像交流に期待している」と話すと、プラープダー氏は「映画は国境を超える素晴らしいツール。異なる文化を結びつける力になっていくと思う」と応え、映画の豊かな可能性について語られました。

第2部

海外の制作者の視点からみる福岡の映像作品

第2部では、福岡で活躍する若手映像クリエーターも登壇。各クリエーターの作品上映後、プラープダー氏からのコメントを中心にトークが行われました。上映作品の1本目は、吉田ヂロウ氏のアニメーション作品『縄』。2本目は、荒木聡太郎氏の『Agent Smith』『PEN DEVE SCENE』を再編集した連作。3本目は、宗大介氏の『それでもわたしは』でした。

プラープダー氏は、個性豊かな手法やテーマについて称賛し、各作品について評価すべき点、作品を磨いていくアドバイスを伝えました。それぞれのクリエーターからは、制作で工夫した点や苦労した話も伝えられ、観客も含めて作品に対する理解が深まりました。

講評後、3人のクリエーターがプラープダー氏に質問。わかりやすさと個性的な表現のバランス、作品中にあえて謎を残す展開、型にはまらない考え方などをテーマにトークが繰り広げられました。

最後にプラープダー氏は福岡について「山も海もあり、都市生活と自然が近い特別な環境。ロケ地として多彩な魅力があり、世界的に見ても興味深い地域だと思う」と述べました。作品上映と対談を通して参加者が相互に刺激を受け、将来への広がりを感じる有意義なセミナーとなりました。

濱下 武志氏による講演会
～アジアを海から考える

■ 実施日／2023年2月4日(土)13:00～15:00
■ 形　式／会場開催、オンライン(LIVEおよびアーカイブ)配信
■ 会　場／九州大学 西新プラザ
■ 参加者／会場56名、オンライン(LIVE)49名
■ 主　催／九州大学アジア・オセアニア研究教育機構、
　　福岡市、(公財)福岡よかトピア国際交流財団

第17回 学術研究賞受賞者
濱下 武志
(日本／歴史学者)

コーディネーター **鬼丸 武士**
(九州大学大学院
比較社会文化研究院 教授)

海域史研究から見た交流の歴史

アジア海域史研究の世界的な第一人者である濱下武志氏。「ナショナルを超える視角とアジア研究」「海域・地域の自然環境と人間社会」「資料と歴史」の3点をテーマに、アジアの人々が海の世界でどのように交流してきたのか、歴史をひもといていきました。

海流、海域、航路を表す地図をはじめとする様々な資料を用いて、九州とアジアの関係や、ヨーロッパや世界から見たアジアなどを多様な角度から解説。アジアの海の特徴として、海域が連鎖しており、その境界となる場所で各国の港湾都市が発展してきたことに言及し、「海は人のつながりを表す空間でもある」と語りました。また、「歴史研究というのは、資料を発掘し、まとめたり整理したりすることが大事」と、資料と向き合う重要性を伝え、主要な資料として、琉球王国が444年間の交流史を記録した『歴代宝案』や、港湾・航路・灯台など海洋インフラの歴史を知る貴重な資料である中国の海関資料を紹介しました。

最後に、アジアを海から考える視点として、「アジアの海域と海流・気象循環」「黒潮がつなぐ島嶼」「朝貢から海関による海域管理」「海流循環・海域連鎖からみる琉球と沖縄」「九州をめぐる海流と海域：九州とアジア太平洋」の5つが示されました。

質疑応答では、現在のアジアの地理的な位置づけやこれからの歴史教育についてなどの質問に真摯な回答があり、濱下氏の広い見識をもとにアジアをより深く理解し、交流の歴史を未来につなぐ道を考える機会となりました。

福岡アジア文化賞 歴代受賞者名鑑
FUKUOKA PRIZE Roll of Honor 1990-2021

第1回 1990

創設特別賞
巴 金
BA Jin
(中国／作家)

『家』、『寒い夜』等、深い人類愛の溢れる作品で世界的に愛読されている現代中国最高の作家。

創設特別賞
黒澤 明
KUROSAWA Akira
(日本／映画監督)

『羅生門』をはじめ数々の名作で日本映画の存在を世界に知らしめた巨匠。国境・世代を超えた映画人に大きな影響を与えた。

創設特別賞
ジョゼフ・ニーダム
Joseph NEEDHAM
(英国／中国科学史研究者)

中国科学史の世界的権威であり、非ヨーロッパ文明に対する世界の知識人の見方を一変させた。

創設特別賞
ククリット・プラモート
Kukrit PRAMOJ
(タイ／作家・政治家)

大河小説『王朝年代記』ほか多くの傑作をものした文豪であり、首相も務めたタイ屈指の文人政治家。

創設特別賞
矢野 暢
YANO Toru
(日本／社会科学者)

日本の東南アジア地域研究の先駆者。国際学術交流にも貢献した。

第2回 1991

大　賞
ラヴィ・シャンカール
Ravi SHANKAR
(インド／音楽家・シタール奏者)

豊かな感受性と幅広い表現力でビートルズにも影響を与えた伝統弦楽器シタール奏者。

学術研究賞
タウフィック・アブドゥラ
Taufik ABDULLAH
(インドネシア／歴史学者・社会科学者)

東南アジアのイスラム、地方史に関する意欲的な研究で知られる歴史学者、社会科学者。

学術研究賞
中根 千枝
NAKANE Chie
(日本／社会人類学者)

アジア諸地域での豊富な調査に基づく研究により、「タテ社会論」等独特の社会構造論を提唱した社会人類学者。

芸術・文化賞
ドナルド・キーン
Donald KEENE
(米国／日本文学・文化研究者)

大著『日本文学史』はじめ多くの著作を世に送り、研究の礎を築いた、日本文学研究の国際的権威。

第3回 1992

大　賞
金 元 龍
KIM Won-yong
(韓国／考古学者)

東アジア全体の視野の中で韓国考古学・美術史学を体系的に位置づけ、その発展に大きく貢献をなした考古学者。

学術研究賞
クリフォード・ギアツ
Clifford GEERTZ
(米国／文化人類学者)

インドネシアでの調査を通じ、異文化理解のための独自の解釈人類学を築き上げた文化人類学者。

学術研究賞
竹内 實
TAKEUCHI Minoru
(日本／中国研究者)

社会科学・文学・思想・歴史に亘る総合的な現代中国論を構築した、日本の中国研究の第一人者。

芸術・文化賞
レアンドロ・V・ロクシン
Leandro V. LOCSIN
(フィリピン／建築家)

東南アジアの風土性とフィリピンの伝統様式の中に現代建築を定着させた建築家。

第4回 1993

大賞
費 孝 通
FEI Xiaotong
（中国／社会学・人類学者）

中国の伝統文化に基づいた視点からの独自の方法論により、中国社会を多面的に分析した社会学・人類学者。

学術研究賞
ウンク・A・アジズ
Ungku A. AZIZ
（マレーシア／経済学者）

マレーシアの実証的研究に優れた業績をあげた経済学者。

学術研究賞
川喜田 二郎
KAWAKITA Jiro
（日本／民族地理学者）

ネパールとヒマラヤ地域の人間の生態を体系的に捉え、KJ法など独自の方法論を創出した民族地理学の第一人者。

芸術・文化賞
ナムジリン・ノロゥバンザト
NAMJILYN Norovbanzad
（モンゴル／声楽家）

モンゴルの伝統的な民謡オルティン・ドーで豊かな表現力を持つ、傑出した声楽家。

第5回 1994

大賞
スパトラディット・ディッサクン
M. C. Subhadradis DISKUL
（タイ／考古学・美術史学者）

タイ美術・考古学・歴史の世界的権威。東南アジア伝統文化の復興と世界史的位置づけに果たした功績は偉大。

学術研究賞
王 賡 武
WANG Gungwu
（オーストラリア／歴史学者）

華人のアイデンティティ論などユニークな研究でアジア研究をリードする歴史学者。

学術研究賞
石井 米雄
ISHII Yoneo
（日本／東南アジア研究者）

タイを中心として歴史、宗教、社会を学際的に研究し、地域研究の発展に貢献した東南アジア研究者。

芸術・文化賞
パドマー・スブラマニヤム
Padma SUBRAHMANYAM
（インド／舞踊家）

インド古典舞踊バーラタ・ナーティヤムの第一人者。実践、創作に加えて舞踊学校の設立など教育面にも貢献。

第6回 1995

大賞
クンチャラニングラット
KOENTJARANINGRAT
（インドネシア／文化人類学者）

インドネシアにおける文化人類学の確立と発展に貢献した文化人類学者。

学術研究賞
韓 基 彦
HAHN Ki-un
（韓国／教育学者）

独創的な基礎主義の理論を提唱し、教育理論体系を築き上げた教育史・教育哲学の研究者。

学術研究賞
辛島 昇
KARASHIMA Noboru
（日本／歴史学者）

刻文資料に通暁し、中世南インドの歴史像を書き換えた、アジア史研究の世界的権威。

芸術・文化賞
ナム・ジュン・パイク
Nam June PAIK
（米国／ビデオ・アーティスト）

テクノロジーと美術を調和させた新しい領域の芸術を開拓した、ビデオ・アートの世界的第一人者。

第7回 1996

大賞
王 仲 殊
WANG Zhongshu
（中国／考古学者）

古代日中交流史の研究に顕著な業績をあげるとともに、中国における考古学の発展の礎を築いた考古学者。

学術研究賞
ファン・フイ・レ
PHAN Huy Le
（ベトナム／歴史学者）

イデオロギーにとらわれない研究姿勢を貫き、ベトナム農村社会史研究に新知見をもたらした歴史学者。

学術研究賞
衞藤 瀋吉
ETO Shinkichi
（日本／国際関係研究者）

中国政治・外交史および国際関係論の分野における日本の第一人者であり、日本外交への提言も数多い。

芸術・文化賞
ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン
Nusrat Fateh Ali KHAN
（パキスタン／カッワーリー歌手）

イスラーム宗教歌謡カッワーリーにおいて並ぶ者のいない、パキスタンの国民的歌手。

第8回 1997

大賞
チェン・ポン
CHHENG Phon
（カンボジア／劇作家・芸術家）

内戦で荒廃したカンボジアにおいて、伝統文化保存の枠組みを構築し、民族精神の回復を訴えた劇作家。

学術研究賞
ロミラ・ターパル
Romila THAPAR
（インド／歴史学者）

独立以後のインド史研究を人類史の中に位置づけて実証的に提示し、従来の歴史叙述を一変させた女性歴史学者。

学術研究賞
樋口 隆康
HIGUCHI Takayasu
（日本／考古学者）

フィールドワークを重視し、シルクロード・中国・古代日中交流史考古学的研究の発展に大きく貢献した考古学者。

芸術・文化賞
林 権 澤
IM Kwon-taek
（韓国／映画監督）

韓国の苦難の近現代史を人々の生き方を通して美しく描き出したアジア映画界の巨匠。

第9回 1998

大賞
李 基 文
LEE Ki-Moon
（韓国／言語学者）

韓国語と日本語、アルタイ諸語の比較研究を行い、新しい視点を導入した韓国語研究の国際的権威。

学術研究賞
スタンレー・J・タンバイア
Stanley J. TAMBIAH
（米国／人類学者）

タイ・スリランカを中心として実証的な研究を行い、オリジナルな解釈を提示した人類学者。

学術研究賞
上田 正昭
UEDA Masaaki
（日本／歴史学者）

日本における古代国家形成過程を、東アジアの視点から解明した歴史学者。

芸術・文化賞
R. M. スダルソノ
R. M. Soedarsono
（インドネシア／舞踊家・舞踊研究者）

芸術学・歴史学・文学などを幅広く研究する一方、舞踊創作・教育にも多大な業績を上げたインドネシアの代表的舞踊家。

第10回 1999

大賞
侯 孝 賢
HOU Hsiaohsien
（台湾／映画監督）

厳しい現実を見つめる眼差しと、台湾の風土と人間への愛を以て『悲情城市』などの名作を生んだ世界的な映画監督。

学術研究賞
大林 太良
OBAYASHI Taryo
（日本／民族学者）

日本民族の文化形成の過程を、アジア諸地域の文化との比較検討において解明した民族学研究の泰斗。

学術研究賞
ニティ・イヨウシーウォン
Nidhi EOSEEWONG
（タイ／歴史学者）

斬新な発想でタイの歴史の大半を書き換えた歴史学者であり、社会的な文章を世に問い続ける文筆家。

芸術・文化賞
タン・ダウ
TANG Da Wu
（シンガポール／ヴィジュアルアーティスト）

独創的な表現活動で、東南アジアにおける現代美術の創造的発展を主導したシンガポールの現代美術家。

第11回 2000

大賞
プラムディヤ・アナンタ・トゥール
Pramoedya Ananta TOER
（インドネシア／作家）

『人間の大地』はじめインドネシアの民族意識を扱った作品群で民族と人間の問題を一貫して問い続けた作家。

学術研究賞
タン・トゥン
Than Tun
（ミャンマー／歴史学者）

厳密で実証的な歴史学の方法論によりミャンマー(ビルマ)史を塗り替えた歴史学者。

学術研究賞
ベネディクト・アンダーソン
Benedict ANDERSON
（アイルランド／政治学者）

世界規模の比較歴史的研究を推進し、『想像の共同体』でナショナリズム研究に新局面を拓いたアイルランドの政治学者。

芸術・文化賞
ハムザ・アワン・アマット
Hamzah Awang Amat
（マレーシア／影絵人形遣い）

マレーシアを代表する影絵人形芝居ワヤン・クリットのダラン（影絵人形遣い）。

第12回 2001

大賞
ムハマド・ユヌス
Muhammad YUNUS
（バングラデシュ／経済学者）

「グラミン銀行」を創始してマイクロクレジットで開発と貧困根絶に挑戦するバングラデシュの経済学者。2006年ノーベル平和賞受賞。

学術研究賞
速水 佑次郎
HAYAMI Yujiro
（日本／経済学者）

市場と国家の関係に共同体の視点を盛り込んだ「速水開発経済学」とも称される学問体系を構築した。

芸術・文化賞
タワン・ダッチャニー
Thawan DUCHANEE
（タイ／画家）

タイの画家。現代人に潜む狂気や退廃、暴力、エロス、死などを独特の画風で表現し、世界に衝撃を与えた。

芸術・文化賞
マリルー・ディアス=アバヤ
Marilou DIAZ-ABAYA
（フィリピン／映画監督）

民衆の喜びや悲しみを描き出した作品を通してアジアの心を世界に伝える、フィリピンを代表する映画作家。

第13回 2002

大賞
張 芸 謀
ZHANG Yimou
（中国／映画監督）

現代中国の苦難に満ちた歩みを、一貫して農民・民衆の立場から描いてきた映画界の巨匠。

学術研究賞
キングスレー・M・デ・シルワ
Kingsley M. DE SILVA
（スリランカ／歴史学者）

スリランカにおける植民地時代の実証研究を通じて歴史学研究に多大な貢献をした歴史学者。

学術研究賞
アンソニー・リード
Anthony REID
（オーストラリア／歴史学者）

『大航海時代の東南アジア』などで、民衆の生活史の視点から東南アジア史に新境地を拓いたオーストラリアの歴史学者。

芸術・文化賞
ラット
Lat
（マレーシア／マンガ家）

マレーシアの大衆の生活を基底に、社会の矛盾を鋭利な諷刺の目で切り取って表現したマンガ家。

第14回 2003

大賞
外間 守善
HOKAMA Shuzen
（日本／沖縄学者）

「沖縄学」を大成し、伝統的な言語・文学・文化の分野を中心に常に沖縄研究をリードしてきた研究者。

学術研究賞
レイナルド・C・イレート
Reynaldo C. ILETO
（フィリピン／歴史学者）

東南アジアで最初の反植民地・独立闘争であるフィリピン革命の先導的研究者。

芸術・文化賞
徐 冰
XU Bing
（中国／アーティスト）

独創的な「偽漢字」や「新英文書法」の創造を通じて東洋と西洋の文化の融合を試み、アジア現代美術の評価を高めたアーティスト。

芸術・文化賞
ディック・リー
Dick LEE
（シンガポール／シンガーソングライター）

シンガポールの多文化社会に生まれ、アイデンティティを追求する中で独特な音楽を開花させた、アジア・ポピュラー音楽の旗手。

第15回 2004

大賞
アムジャッド・アリ・カーン
Amjad Ali KHAN
（インド／サロード奏者）

インド古典弦楽器「サロード」演奏の巨匠。「音楽はあらゆるものを超える」という信念のもと、アジア音楽の精神を広く伝えた。

学術研究賞
厲 以 寧
LI Yining
（中国／経済学者）

中国の経済改革の必要性をいち早く理論的に提起し、改革の実現への道程を準備した経済学者。

学術研究賞
ラーム・ダヤル・ラケーシュ
Ram Dayal RAKESH
（ネパール／民俗文化研究者）

ネパール女性に関する諸問題にも取り組む、ネパールの民俗文化研究の第一人者。

芸術・文化賞
ローランド・シルワ
Roland SILVA
（スリランカ／文化遺産保存建築家）

イコモス（国際記念物遺跡会議）委員長を務めアジア遺産の評価と保存に大きく貢献したスリランカの遺跡保存の専門家。

第16回 2005

大賞
任 東 権
IM Dong-kwon
（韓国／民俗学者）

韓国民俗学の開拓者であり、日韓中の学術交流にも大きく貢献した東アジア民俗学界の第一人者。

学術研究賞
トー・カウン
Thaw Kaung
（ミャンマー／図書館学者）

貴重な貝葉写本の保存と活用に多大な業績をあげた、図書館学者であり、古文献保存学の泰斗。

芸術・文化賞
ドアンドゥアン・ブンニャウォン
Douangdeuane BOUNYAVONG
（ラオス／織物研究家）

ラオス伝統織物の研究と啓蒙活動を通じて、ラオスおよびアジアの伝統文化の保存と継承に大きな貢献をしている織物研究家。

芸術・文化賞
タシ・ノルブ
Tashi Norbu
（ブータン／伝統音楽家）

ブータンの民間人としては初めて、音楽を中心に伝統文化の保存と継承に取り組んでいるパイオニア。

第17回 2006

大賞
莫 言
MO Yan
（中国／作家）

現代中国文学を代表する作家。中国の都市と農村の現実を独特のリアリズムと幻想的な方法によって描いた、世界文学の旗手。2012年ノーベル文学賞受賞。

学術研究賞
シャグダリン・ビラ
Shagdaryn BIRA
（モンゴル／歴史学者）

世界規模でのモンゴル研究のリーダーであり、歴史・文化・宗教・言語にわたる優れた研究業績を残した歴史学者。

学術研究賞
濱下 武志
HAMASHITA Takeshi
（日本／歴史学者）

アジア域内の交易・移民・送金のネットワークに焦点をあて、斬新な方法で地域の歴史像の構築に先駆的役割を果たした歴史学者。

芸術・文化賞
アクシ・ムフティ
Uxi MUFTI
（パキスタン／民俗文化保存専門家）

「ローク・ヴィルサ」を創設しパキスタン文化の基層を実証的に追求し続ける、民俗文化保存の第一人者。

第18回 2007

大賞
アシシュ・ナンディ
Ashis NANDY
（インド／社会・文明評論家）

臨床心理学と社会学を統合させた独自の方法論によって、鋭い社会・文明評論活動を行う行動的知識人。

学術研究賞
シーサック・ワンリポードム
Srisakra VALLIBHOTAMA
（タイ／人類学・考古学者）

関係諸学を統合しつつ、徹底した現地調査に基づいて、タイの新しい歴史像を再構築した人類学・考古学者。

芸術・文化賞
朱 銘
JU Ming
（台湾／彫刻家）

深い東洋の精神性を示す表現力と常に革新を求める創造へのエネルギーをあわせもつ、彫刻の巨匠。

芸術・文化賞
金 德 洙
KIM Duk-soo
（韓国／伝統芸能家）

「サムルノリ」を創始し、伝統音楽を継承すると同時に先端的音楽を創造し続ける伝統芸能家。

第19回 2008

大賞
アン・ホイ
Ann HUI
（香港／映画監督）

幅広いジャンルで多くの話題作を発表して香港映画界を牽引する、アジアの女性監督のパイオニア。

学術研究賞
サヴィトリ・グナセーカラ
Savitri GOONESEKERE
（スリランカ／法学者）

南アジアにおける人権やジェンダーに関する研究で優れた業績を挙げ、高等教育の改革にも尽力した法学者。

学術研究賞
シャムスル・アムリ・バハルディーン
Shamsul Amri Baharuddin
（マレーシア／社会人類学者）

民族問題・マレー世界の研究を東南アジアにおいて一貫してリードする社会人類学者。

芸術・文化賞
フォリダ・パルビーン
Farida Parveen
（バングラデシュ／音楽家）

バングラデシュの伝統的な宗教歌謡バウル・ソングの芸術的評価を高め、国際的な普及に貢献した国民的歌手。

第20回 2009

大賞
オギュスタン・ベルク
Augustin BERQUE
（フランス／文化地理学者）

欧日の人間社会と空間・景観・自然に対しての哲学的思索を重ね、独自の風土学を構築し、日本文化を実証的に捉えて、日本理解に大きく貢献した文化地理学者。

学術研究賞
パルタ・チャタジー
Partha CHATTERJEE
（インド／政治学・歴史学者）

正統な歴史から振り落とされてきた「声なき人々」の存在を明らかにし、アジアや途上国の視点から先鋭な問題提起を行ってきた政治学者・歴史学者。

芸術・文化賞
三木 稔
MIKI Minoru
（日本／作曲家）

邦楽の現代化と国際化をリードし、日本とアジア、また東洋と西洋の音楽の交流と創造に大きな貢献をなした作曲家。

芸術・文化賞
蔡 國 強
CAI Guoqiang
（中国／現代美術家）

北京五輪での花火の演出を手がけるなど、火薬や花火を用いた独創的手法と、中国伝統の世界観に根ざした表現で、芸術表現の新たな可能性を拓いた現代美術家。

第21回 2010

大賞
黄 秉 冀
HWANG Byung-ki
（韓国／音楽家）

韓国の伝統的楽器「伽倻琴（カヤグム）」の伝統を継承し、また新たな音楽独創を融合した演奏家であり作曲家。

学術研究賞
ジェームズ・C・スコット
James C. SCOTT
（米国／政治学者・人類学者）

東南アジアから始まり近現代世界における国家の支配とそれに反発し、抵抗する人々の関係を明らかにした政治学者であり人類学者。

学術研究賞
毛里 和子
MORI Kazuko
（日本／現代中国研究者）

アジア地域研究の共通基盤となる方法的枠組みの構築に大きく貢献した、政治学者であり、日本における現代中国研究の第一人者。

芸術・文化賞
オン・ケンセン
ONG Keng Sen
（シンガポール／舞台芸術家）

現代的な感覚でアジアと欧米の伝統を鮮やかに出合わせる演出作品は、舞台芸術の国際的フロンティアを切り拓く。世界的に活躍する舞台芸術の旗手。

第22回 2011

大賞
アン・チュリアン
ANG Choulean
（カンボジア／民族学者・クメール研究者）

「カンボジア人によるカンボジア研究」の立場から、長い歴史に立脚した生活文化要素を自らの民族感性で解明。さらにアンコール遺跡群の救済事業における国際的枠組みをつくったカンボジアを代表する民族学者。

学術研究賞
趙 東 一
CHO Dong-il
（韓国／文学者）

主著『韓国文学通史』全6巻は、韓国文学研究史上の金字塔と評され、研究領域は儒教・漢字文化圏全域に及ぶ。韓国、日本、中国、ベトナムの比較文学・比較文明の研究者。

芸術・文化賞
ニールズ・グッチョウ
Niels GUTSCHOW
（ドイツ／建築史家・修復建築家）

南アジアを中心とした歴史的建築や都市への洞察を深め、建造物と都市の保存と修復を学際的研究から高次の哲学的営為として昇華させ先導してきた建築史家・修復建築家。

第23回 2012

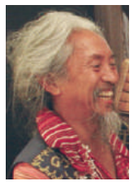
大賞
ヴァンダナ・シヴァ
Vandana SHIVA
（インド／環境哲学者）

開発やグローバリゼーションのもたらす矛盾を鋭く指摘し続け、自然を慈しみ、生命の尊厳を守る斬新な思想を語り、多くの民衆を導いてきた環境哲学者。

学術研究賞
チャーンウィット・カセートシリ
Charnvit KASETSIRI
（タイ／歴史学者）

アユタヤ史の研究において傑出した業績をあげたほか、タイ近現代史の研究成果を教育に取り入れ、活発な啓蒙活動を行う東南アジアを代表する歴史学者。

芸術・文化賞
キドラット・タヒミック
Kidlat Tahimik
（フィリピン／映画作家・アーティスト・文化観察者）



途上国フィリピンに生きる者の矜持と文化帝国主義批判を独特のユーモアに包んで描く作品群を発表してきた、アジアの個人映画作家の先駆的存在。

芸術・文化賞
クス・ムルティア・パク・ブウォノ
G.R.Ay. Koes Murtiyah Paku Buwono
（インドネシア／宮廷舞踊家）

幼少よりジャワ文化を深く学び、300年に及ぶ伝統的宮廷舞踊を広く世に紹介するとともに、中部ジャワ伝統文化の保存と発展に尽力してきた、宮廷舞踊の継承者。

第24回 2013

大賞
中村 哲
NAKAMURA Tetsu
（日本／医師）

パキスタンとアフガニスタンで、30年にわたり患者、貧者、弱者のための医療や開拓・民生支援の活動を続け、異文化の理解と尊重を求める国際協力を実践。

学術研究賞
テッサ・モーリス＝スズキ
Tessa MORRIS-SUZUKI
（オーストラリア／アジア地域研究者）

民族や国家の境界を越え、新しい地域協力や市民社会の在り方を社会の端から構想し、アジアの人々の相互理解に多大な貢献を為しているアジア地域研究者。

芸術・文化賞
ナリニ・マラニ
Nalini MALANI
（インド／アーティスト）

映像や絵画を組み合わせた大がかりな空間造形を通して、宗教対立や戦争、女性への抑圧、環境破壊など、世界が直面する今日的かつ普遍的なテーマに挑み続ける美術家。

芸術・文化賞
アピチャッポン・ウィーラセタクン
Apichatpong WEERASETHAKUL
（タイ／映画作家・アーティスト）

民話や伝説の中に個人の記憶や前世のエピソード、時事問題に対する言及などを挿入する斬新な映像話法で世界の映画界に大きな旋風を巻き起こしている気鋭の映画作家。

第25回 2014

大賞
エズラ・F・ヴォーゲル
Ezra F. VOGEL
（米国／社会学者）

戦後アジアの政治経済社会の変動や、アジアの新工業経済地域（NIEs）の先駆的な研究に業績をもち、国際関係に関する冷静で重みのある提言を行う東アジア研究の権威。

学術研究賞
アジュマルディ・アズラ
Azyumardi AZRA
（インドネシア／歴史学者）

イスラームの宗教・文化の深い理解に基づき、多元的で調和ある市民社会の形成に尽力し、異文化間の相互理解に貢献するパブリック・インテレクチャル。

芸術・文化賞
ダニー・ユン
Danny YUNG
（香港／文化クリエイター）

多数の斬新な舞台作品を発表する一方、文化政策や芸術教育にも取り組み、アジアと世界、伝統と現代を繋ぐ多彩な活動でアジアの芸術文化を牽引する文化クリエイター。

第26回 2015

大賞
タン・ミン・ウー
Thant Myint-U
（ミャンマー／歴史学者）

グローバルな視点からミャンマーの歩みを綴る傑出した歴史家であるとともに、歴史的建造物の保存や持続可能な都市計画に取り組み、自国の平和創造をめざす知的指導者。

学術研究賞
ラーマチャンドラ・グハ
Ramachandra GUHA
（インド／歴史学者・社会学者）

民衆の側に立った「環境史」の地平を切り開き、また、多様性を抱える大国インドの複雑な歴史を丁寧に辿り民主主義の実像を描いた著書でも知られる、インドを代表する歴史家。

芸術・文化賞
ミン・ハン
Minh Hanh
（ベトナム／ファッションデザイナー）

ベトナム固有の少数民族の刺繍や織物を融合させた現代的なデザインを創造し、若手育成や市場開拓に取り組みながら、ファッション文化の発展に貢献するデザイナー。

第27回 2016

大賞
A.R.ラフマーン
A. R. RAHMAN
（インド／ 作曲家・作詞家・歌手）

民族性豊かな南アジアの伝統音楽と西洋のクラシック音楽、現代の大衆音楽を大胆に融合させた個性的な楽曲で、映画音楽の新境地を開拓する世界的に有名なインドの国民的アーティスト。

学術研究賞
アンベス・R・オカンポ
Ambeth R. OCAMPO
（フィリピン／歴史学者）

著書やメディアを通した発言等を通じ、フィリピンの歴史をわかりやすく伝え、市民の国際感覚の育成に寄与するなど、フィリピンの学術・文化・社会の発展に大きく貢献している歴史学者。

芸術・文化賞
ヤスミーン・ラリ
Yasmeen LARI
（パキスタン／建築家・建築史家・人道支援活動家）

数多くの歴史的建造物の保存修復活動や、地震や水害等の災害に対して低コストで環境にやさしいシェルターの提供を行うなど人道支援活動にも尽力した、パキスタン初の女性建築家。

第28回 2017

大賞
パースック・ポンパイチットおよびクリス・ベーカー
Pasuk PHONGPAICHIT & Chris BAKER
（タイ／経済学者）＆（英国／歴史学者）

タイ社会が直面する問題を政治と経済、社会と文化など多面的に分析した共同研究は傑出しており、多大な社会貢献をしてきたタイの代表的知識人。

学術研究賞
王 名
WANG Ming
（中国／行政学者、NGO・市民社会研究者）

中国で初めてNGO研究センターを立ち上げ、中国のNGO研究の水準を飛躍的に高めた、NGO研究、環境ガバナンスの第一人者。

芸術・文化賞
コン・ナイ
KONG Nay
（カンボジア／吟遊詩人、チャパイ・マスター）

内戦とポル・ポト時代の弾圧を奇跡的に生き延び、現在も演奏・作曲・後継者育成等の活動を精力的に続けることで、伝統的語り物音楽・チャパイの弾き語りを現代に伝える、カンボジアの伝説的吟遊詩人。

第29回 2018

大賞
賈 樟 柯
JIA Zhangke
（中国／映画監督）

21世紀の中国を代表する映画監督。急激に経済発展する社会的歪みの中で、苦悩しながらもしたたかに生きる若い人々を等身大に描いた作品は、世界的に高く評価されている。

学術研究賞
末廣 昭
SUEHIRO Akira
（日本／経済学者、地域研究者（タイ））

タイ経済研究を基盤として、アジア全体の工業化や経済実態を解明し、日本のアジア研究の発展に主導的な役割を果たすなど、日本におけるアジア経済研究の第一人者。

芸術・文化賞
ティージャン・バーイー
Teejan Bai
（インド／パンダワーニー奏者）

古代インドの叙事詩『マハーバーラタ』に基づく歌語りのパンダワーニーの第一人者。先住民であり女性であることで二重にインド社会から差別される中で歌い続け、人々に勇気を与えている。

第30回 2019

大賞
ランドルフ・ダビッド
Randolf DAVID
（フィリピン／社会学者）

社会学者としての知見を大学、テレビ、新聞等を通じて広く市民と共有。フィリピンにおける社会的正義のために活動し、アジアの学術・文化の交流推進と相互理解の深化にも尽力した「行動する知識人」。

学術研究賞
レオナルド・ブリュッセイ
Leonard BLUSSÉ
（オランダ／歴史学者（東南アジア史専門家））

広汎な時空間を対象とする近世東アジア／東南アジア海域史を開拓し、学際的なアプローチに基づく歴史学を確立した歴史学者。その学問は、理想的な形のグローバル・ヒストリーとして評価されている。

芸術・文化賞
佐藤 信
SATO Makoto
（日本／劇作家、演出家）

現代的感覚と伝統的美意識を融合させた優れた舞台を数多く制作し、国内外で高く評価されている劇作家、演出家。公共劇場の芸術監督としての活動やアジアの演劇人育成にも熱心に取り組んでいる。

第31回 2021

大賞
パラグミ・サイナート
PALAGUMMI Sainath
（インド／ジャーナリスト）

グローバリゼーションに揺れるインドで、貧しい農村を訪ね、農民の声を聴き、「農民の物語」を伝える気骨のジャーナリスト。激動のアジアで、新たな「知」と市民的連帯を追求する。

学術研究賞
岸本 美緒
KISHIMOTO Mio
（日本／歴史学者）

中国明清期の社会経済史を専門とする歴史学者。日本における東洋史学の正統な継承者として、中国社会への内在的な視線とグローバルな視野で、常に斬新かつ問題提起的な研究を行う。

芸術・文化賞
プラープダー・ユン
Prabda YOON
（タイ／作家、映画作家、アーティスト）

タイを代表する作家の一人であり、評論家、脚本家等としても活躍するマルチクリエイター。タイ文学・思想の発展に寄与し、タイにおける日本理解の更新にも貢献する。

これまでの授賞式の様子

第1回（1990年）

第10回（1999年）

第20回（2009年）

第30回（2019年）